

「バッドエンド描きのハッピーエンド講座」

1

【登場人物】

環

鈴木

古澤

漫画神

ハヤト／隊員②

ジーニアス山田／隊員③

OL／隊員①

ハト次郎／隊長

※以下サブキャラ達は兼ね役で

ヒデホ、マツヤ、ヨシノヤ、スキヤ

マイケル、ジョン、ジェニファー、ゾンビ

ピッチャー、キャッチャー、マネージャー、運転手

サヤカ、テツロウ、ジン、暗黒太郎

ジャッジマン、久米島、斉藤、野長

店長、店員

ハト婆、黒子

【プロローグ】

隊長 「な、なんですって！？それは本当ですか？まさかエイリアンが！」

明転。

舞台は宇宙ステーション。隊長が電話をしている。

音声 『地球時間20時12分。この宇宙ステーションXX内で、隊員が1人、エイリアンに体に乗っ取られたという情報が本部から入ってきたのである』

隊長 「：はい、奴らエイリアンは本当に狡猾です。はい、体に乗っ取った隊員に完璧になりきっているでしょう。しかし私は隊長の名にかけ、隊員の動きを細かく観察し、必ずやエイリアンを見つけだします！」

隊長、電話を切る。そして懐から光線銃を取り出す。

隊長 「私の手で…安らかに葬ってやろう…！」

隊員① 「隊長ー」

隊長、銃を懐にしまう。隊員①が下手から入ってくる。頭には触覚が付いている。

隊長 「どうしたオエル隊員（隊員①を見て、触覚に気付く）…！？」

隊員① 「ジロウ隊長ー聞いてくださいよー3つあった饅頭を、2人の隊員が全部食べちゃったんですよー！最悪ですよーもうー私の分は？私の分は？って、あれ？隊長？話聞いてますか？」

隊長 「ああ聞いている。そして、グッバイだオエル隊員（銃を隊員①に突きつける）」

隊員① 「なんで？」

隊長 「極悪非道のエイリアンめ。一撃で仕留めてくれる」

隊員① 「いやいやいや！いったいどういうことですか！？あ、まさか…！」

隊長 「ミスに気付いたか」

隊員① 「隊長の分の饅頭を無視したから？」

隊長 「違うわ！お前…そんな自然に食いしん坊なオエル隊員を演じられるなら、なぜ肝心の部分を隠し忘れるのだ！」

隊員① 「た、隊長がご乱心よー！誰か来てー！」

隊長 「しかしまさかこんな簡単に見つかるとはな」

隊員② 「どうしたどうした？」

隊員②が下手から入ってくる。頭には触覚が、額には大きな目が付いている。

隊長 「ハヤト隊員、良い所に来て（隊員②を見て、触覚に気付く）…くれた」

隊員① 「助けてハヤト君」

隊員② 「一体何事ですか隊長？…隊長？」

隊長 「…おかしくない？」

隊員①② 「はい？」

隊長 「いや1体って聞いているんだけどこっちは。とかキミ達も、どっちかはどっちかを疑問に思わないといけないでしょうよ。だって片方は本物なのだから！昨日までなかったでしょそんなの！」

隊員② 「…饅頭の話か？」

隊長 「饅頭のこととはもういいよ！お互いを良く見ろ！おかしなところがあるだろうが！」

隊員①② 「うー…ん？（お互いを見て、肩をすくめる）」

隊長 「なんでだよ！こいつの額の目とか色々あるだろ！」

隊員① 「いやあの、最近ステーション内で流行っているんですよ、エイリアンごっこ」

隊長 「は？」

隊員② 「はい、流行ってます。エイリアンごっこ」

隊長 「何それ？とんでもないタイミングで流行ったなおい。お前らちよつとき、」

隊員③ 「何やら騒がしいな」

下手側を警戒する隊長。隊員③、下手から入ってくる。しかし外見は普通。

隊員③ 「どうした？」

隊長 「よかったー。ヤマダ隊員は普通だー」

隊員③ 「はあ？（隊員①②を見る）お、おい！一体なんだお前達のそれ…！」

隊長 「もっと言ってやってくれよ」

隊員③ 「お前達、業務中にそんなくだらない遊びをいつまでやってる、」

隊員③、隊員①②を怒るため後ろを向くと首や背中に触覚や目、口が付いている。

隊長 「待て待て待て待てーい！」

隊員③ 「え？」

隊長 「あぶねー！危うく見落とすところだったー！何？お前はどっち？エイリアンごっこ？」

隊員③ 「心外だ。俺はそのような遊び、断じてやらん」

隊長 「じゃあお前が一番怪しいよ！こうなってくると！エイリアンごっこやってないなら！」

隊員③ 「くつくつく…！実は俺もやってる、エイリアンごっこ」

隊長 「やってんのかい!!」

隊員① 「隊長、さっきから何の話をしているのちやんと説明してくださいグギャ」

隊長 「グギャ？」

隊員② 「隊長疲れているんですたら向こうのお部屋でグギャギャーギャ、ギャーギャー」

隊長 「うん、俺は部屋で何を勧められた？」

隊員③ 「グギャギャグギャ、グギャーギャギャー、グーギャーギャー。グルツチ」

隊員①と隊員②、笑う。

隊長 「今の言葉で通じたんだキミ達？もう全員エイリアンなのかな？…というかもういい加減にしるお前ら！一旦俺の話を聞け！」

隊員①②③ 「グギャ」

隊長 「グギャじゃねえよ。ついさつき、本部から緊急の連絡があった。今から言う情報は確かなものだ。この隊員の中に一体…エイリアンが紛れ込んでいるんだ！」

隊員①②③ 「ええ！？」

隊長 「ホントか？その反応。…良いか？もうエイリアンごっこは終わりだ。今から少しでも怪しい行動をした奴は、この光線銃で撃つぞ！」

隊員達、動揺する。

隊長 「まずはそのふざけた触覚をとれ！…早くとれ！」

隊員達、触覚をとる。

隊長 「おいハヤト。その額の目を消せ。早く消せ！」

隊員② 「いや…これ、油性のマジックで書いてまして…すぐとれないですよ」

隊長 「そうか、分かった。それじゃあお前がエイリアンということだな？」

隊員② 「え？違います！そんな理由だけで…！」

隊長 「離れる皆…こいつがエイリアンだあ（隊員②に銃を向ける）」

隊員② 「ち、違う！俺はエイリアンじゃない！隊長！信じてくれ！隊長！俺は違う！」

隊長、隊員②を撃つ。

【1幕】

明転。

舞台は環の仕事場。仕事机と椅子が2つ。環と担当編集の鈴木が座っている。

鈴木「いやーいよいよ最終回ですね、環先生」

環「そうだねえ」

鈴木「思えば私がまだ新人だった頃、環先生の担当編集を引き継ぐことになりましたけど…あの時はどうなることかと思いましたが。なんたって当時から週刊少年ダッシュの看板漫画の1つでしたからね」

環「鈴木君の最初、覚えてるなー。そんな凶体で妙にプルプル震えて緊張してたもんねえ」

鈴木「ははは…でも環先生、ホント色々お世話になりました」

環「ちよつとやめてよー。こつちだつてお世話になってました。ていうか肝心の最終回がまだ残ってたんだからさ」

鈴木「はい。それで、その最終回についてなんですが」

環「うん」

鈴木「前回の話でボスを倒すことができたじゃないですか。なので最終回はベタですけどそのまま皆の後日談が良いかなーと思うのですが如何でしょうか？」

環「はいはいはい。まあまあ良いんじゃないかな」

鈴木「ですよね」

環「でもここは逆に、そのボスがもう一度復活するってのはどうだろう？」

鈴木「え？復活？はいはい」
環「それで、主人公のはやびーがやられるのよ。いややられるっていうか…殺されるのよ」

鈴木「殺される…殺される？」

環「いやいやいやでも！そこにヒロインのほら、さーやが出てきて、死ぬ」

鈴木「う、う、う、うん？」

環「で、で、で！ライバルとか他の仲間達が今一度集まるのよ！そして、死ぬのよ。主人公サイド全滅してしまいます！」

間

環「終わり」

鈴木「終わり！？（大声）」

環「うわあ！びっくりしたー」

鈴木「いやびつくりしたのはこっちですよ。なんですかその結末。ちょっと変な冗談は

やめてくださいよ。真面目に聞いちゃったじゃないですか」

環「ああ…そっかさつか。ごめんごめん。それじゃあ、ちゃんね。そのボスがさ、はやびーとの戦いで悪の心が消えて見事改心するのよ」

鈴木「おお、そういうのですよ」

環「それで2人に友情が芽生えて、仲良く仲間の元に戻る訳」

鈴木「はい、良いラストになりそうですね」

環「で、そのボスを新しい仲間だと紹介された皆はまあそこは当然、」

鈴木「はい」

環「そんな都合の良い話があるか、つって皆ナイフ持ってボスを刺すじゃんか」

鈴木「はい…うん？うん？」

環「滅多刺しにされるボスは『いやリアル黒ひげ危機一髪かいー』言うてね」

鈴木「は？」

環「で、それ見てはやびーは『連れてこなけりゃあよかったなー』と思うのでした、
終わり」

鈴木「また終わっちゃった！バッドエンドが過ぎるでしょう！というかさつきから、何を言ってるんですか！」

環「はははは…」

鈴木「先生、この作品は少年ダッシュの看板作品なんですよ？子供たちに大人気なんですよ？いや最後ですからね、打ち合わせを少しふざけたいという気持ちも分かりますけど、そろそろ真面目にやりましょうよ」

環「分かった分かったよ。ごめんって。…真面目にやるよ」

鈴木「お願いします」

環「…戦いの後、皆が家路につくため道を歩いていると、大型トラックが突っ込んでくる」

鈴木「馬鹿か。え？馬鹿なの？…え、馬鹿？」

環「馬鹿じゃないよ。言い過ぎだぞ鈴木君。仮にも私、看板作品の先生だぞ」

鈴木「すみません…思わず。でも先生だって悪いですよ。いつまでもふざけるから」

環「…ふざけてないよ」

鈴木「え？」

そこに環のタブレットに通知音が鳴る。環、タブレットを確認する。

環「あ、もう1万かあ」

鈴木「え？何がですか？あ、聞いても大丈夫ですか？」

環「ああうん。『皆のお絵描きサイト』に投稿してた漫画の閲覧数が1万を超えてね。」

その通知がきたのよ」

鈴木「え、『皆のお絵描きサイト』ってあの、描いた絵とか漫画とか自由に投稿できるサイトですよ？あそこに先生も投稿しているんですか？」

環「うんそうそう。勿論少年ダッシュで使ってるペンネームじゃなくて、別のペンネームだけど。國分環だから、たまきんっていうの」

鈴木「サイターのペンネームですね。小学生ですか」

環「プロになる前からよく投稿しててね。…今も連載の息抜きとかで簡単な絵とか短い漫画描いて投稿してるのよ」

鈴木「趣味でも漫画描くなんて、先生は本当に漫画がお好きなんですね。でもよく週刊連載していてそんなに描く余裕がありますね？」

環「まあ速く絵が描けるのだけは取り柄だからさ。だから基本アシスタントも雇わないし」

鈴木「いやいや速筆だけって何をおっしゃってるんですか。話だって面白いじゃないですか」

環「てへへ」

鈴木「照れ方が漫画。いやーでも先生が投稿した作品、私もちょっと読んでみたいですわね」

鈴木「良いよ良いよ、読んで読んで。感想聞かせてよ（タブレットを鈴木に渡す）」

環「これ、最近投稿した短編漫画」

鈴木「何々？タイトル『エイリアンは誰だ！？』へえーSFギャグですか。宇宙ステーションにいる隊員の1人がエイリアンに体に乗っ取られていて…」

音声『数分後』

鈴木「（無の表情から）……後味わるううーなんだこれ！ええ？あんなコミカルに進んでたのに？ラスト急に後味悪いなおい。死ねない体になってらー、じゃねえよ！どういうこと？どうやったらこんなラスト描ける頭になるんですか！？」

環「てへへ」

鈴木「いや今度は褒めてないですよ。皮肉ですよ？なんですかこのバッドエンド。『皆のお絵描きサイト』にはこんなのばかり投稿してるんですか？」

環「いやいやいや。別に他にも色んなジャンル描いてるから。1つ読んだだけで私、いや、たまきんのことを知った気にならないで！！」

鈴木「すみません…では他の短編も読んで良いですか？」

環「良いよー（にこやかに）」

鈴木「情緒どうなってるんですか。（タブレットを見ながら）えっと…スポーツ漫画に、

ファンタジー物、こっちは、ちょっとエロいやつもありますね。ホントに色々描いてますね。読むの楽しみです」

環（声）『その後鈴木君は楽しそうに私の漫画達を読んてくれた。でも、最後の方になると必ず苦虫を噛み潰したような顔をする。一体、なぜなのだろうか？』

鈴木「4つめ『ふわふわ妖精ぼにぼーに』。ふわふわな妖精さん達が楽しく遊んでる漫画。癒される。うん、最後は妖精さん達が、飢えた人間達に、頭から食べられる（苦い顔）」

環（声）『またこの顔だ。一体、なぜなのだろう、』

鈴木「後味が悪いからだよ！」

環「え？」

鈴木「もう良いわこのパターン！ゼーんぶの漫画後味悪かったですよ！先生あの…先ほどの最終回の打ち合わせでもちよつと感じていたんですけど…もしかして先生って、バッドエンドしか描けないんですか？え？狙って描いているんですか！？それとも無意識なんですか！？先生、ちゃんとハッピーエンドも描けますよね！？」

環「カッチーン…さっきから黙って聞いてればペラペラとさえずりやがってからに！描けますけどー？ちゃんとハッピーなエンディングウも描けますけどー？」
鈴木「めっちゃキレてる…。す、すみません私も言い過ぎました。でも作品読んでたら不安になってきました…」

環「だったら今から即興で何か短い漫画でも描こうかい？ネーム、ラフ程度で良いんだったら描くよ？」

鈴木「いやしかし、そこまでして頂くのも…時間ももつたいないですし」

環「私もね、そこまで言われたら引き下がれないから」

鈴木「…分かりました。それでは少しお願いできますか？」

環「よしきた。私だってね、ハッピーエンドを意識すればちゃんと描けるから」

鈴木「はい」

環「それじゃあ漫画の設定とかは鈴木君が決めて。私はその結末だけ即興で描くから」
環、タブレットを持って鈴木の話に合わせて描き始める。ヒデホ、マツヤ、ヨシノヤ、スキヤが合わせて舞台に出てくる。

鈴木「じゃあそうですね…では少女漫画の恋愛話でいきましょう。女の子が1人いて、その子をそれぞれ個性豊かなイケメン3人が取り合っているんです。そしてラスト、女の子が3人の中から1人を選ぶ。ベタですけどここからハッピーエンドを描いてみてください」

環「…楽勝。もう見えた」

鈴木「流星の速筆ですね」

ヒデホ「皆…。マツヤ君…ヨシノヤ君…スキヤ君…」

鈴木「名前もう少しなんとかならなかったんですか？」

マツヤ「俺様を選べよ、ヒデホ」

ヨシノヤ「キミの好きにしまよ。でも俺がキミを一番ハッピーにできるけど」

スキヤ「僕は、ヒデホさんのことが好きだ。あなたも好きになってくれると…嬉しいな」

鈴木「確かに個性豊かなイケメン達ですね。イケメン達がね、イケメンだあ」

ヒデホ「私…分かったの。簡単なことだったの。胸に手を当てて、自分に正直になるのが一番だ…分かったの！（スキヤを見る）」

鈴木「おお！これは決まりかな？」

ヒデホ、スキヤをスルーし、ヨシノヤ→マツヤと視線を流すが最終的に正面を向く。

ヒデホ「私…この3人をとつかえひつかえしたい！」

鈴木「何言ってるの？」

ヒデホ「3人を曜日ごとにとつかえひつかえがしたい！それが私の正直な気持ち！」

3人「ええ…」

鈴木「ほらいケメンたちも皆戸惑ってるよ」

ヒデホ「それじゃあ月火はマツヤ君で水木はヨシノヤ君、金土はスキヤ君でそれで日曜日は、ホストクラブに行くの」

鈴木「皆でいるとかじゃないんだ。自由過ぎるだろこの子。こんなんじゃ皆に捨てられる」

3人「それでいこう」

鈴木「良いやつ過ぎるこいつら。もうホントにイケメンに見えてきたよ。まあでもこれはこれでヒデホちゃんにとってはハッピーだから、良いのかな？まあバッドエンド、ではないよね、うん」

ヒデホ「あははは、うふふふ。あははは、うふふふ。3人も、ずーっと一緒だよ」

ナレーション『えー今日未明、行方不明となっていた3人の男子高校生が死体で発見されました。場所は40歳無職、野田ヒデホ容疑者の自宅です。野田容疑者は妄想癖があるとされており、3人の死体に抱き付いていたところを…』

ヒデホ「やめろー！離せ！私達は4人で愛し合っているのよ！やめて！やめてよ！いやあああ!!私の王子様たちー!!!」

環「終わり」

ヒデホ、マツヤ、ヨシノヤ、スキヤの4人、顔を鈴木に向ける。

鈴木「終わりがかい！」

環「…どうだった、かな？」

鈴木「いやバッドエンドですよ！よくそんな恐る恐る聞けますね。けっこうな後味の悪さでしたよ」

4人、はける。

環「ちくしょー。途中まではよかったと思うんだけどなあ」

鈴木「まあ途中もけっこうおかしかったですけどね」

環「もう一回やろう。今のは、設定が悪かった」

鈴木「しれっと私のせいにしないでくださいよ。あの、それで私1つ思ったんですけど」

環「何？」
鈴木「環先生の作品って、途中まではコミカルだったり感動的だったり悪い結末を感じさせない作風じゃないですか？そしてラストに急なバッドエンドがやってくる」と

環「へー」
鈴木「へー、じゃないですよ。なので、逆に今度は途中までは如何にもなバッドエンドを匂わせた展開で物語を進めていけば、最後はハッピーエンドで描き終えることが出来るんじゃないですか？」

環「…キューピン（タブレットにペンを置く）」
鈴木「なんかしっくりきてくれたのかな。ではその方向でやってみましょう」

環、タブレットを持って鈴木の話に合わせて描き始める。ジョン、マイケル、ジエニファー、ゾンビが合わせて舞台に出てくる。

鈴木「それでは設定は…ゾンビで溢れた世界にしましょう。初めは恋人や親友と協力して逃げる主人公なんですが、途中でその2人もゾンビの群れに襲われてしまいました。そして残ったのは主人公1人。自暴自棄になった主人公は武器を持ってゾンビの群れに突撃する。はい、ではここからラストを描いてください」

環「これは中々バッドな展開で進行してるじゃない…燃えるわ」
ゾンビ「ヴアアア…！」
ジョン「俺にはもう…何も残っていない…！ゾンビどももおお!!」

ジョン、必死な形相でとにかくゾンビに向かって暴れる。

鈴木 「おお、おお、大量のゾンビに1人で戦っていますね」

ジョン 「天国で見ているか愛するジェニファー…！そして親友のマイケル…！」

回想。ジェニファー（上手側）とマイケル（下手側でゾンビと戦っている）が出てくる。

鈴木 「お、簡単な回想かな？」

マイケル 「このゾンビ共め！怪我をしているジョンの部屋には、一步も入らせないぞ！」

鈴木 「マイケル、良いやつだな。親友のために…！」

ジョン 「何だか外が騒がしいな…（苦しそう）」

ジェニファー 「怪我は大丈夫なの？ジョン」

ジョン 「…キミの魅力の前では、怪我の痛みなんて吹っ飛ばさ」

ジェニファー 「ジョン…」

ジョン 「ジェニファー…」

鈴木 「まさかイチヤイチヤしてんのお前ら！？マイケル1人で頑張ってるのに、

ゾンビ、マイケルを襲いそのまま2人はけていく。

マイケル 「（→鈴木の台詞食い気味で）うわああああ…！」

鈴木 「マイケール!!」

ジェニファー 「ちよつとマイケル、うるさいわよ」

ジェニファー、上手に行くがゾンビが出てきて襲われ、そのまま2人はけていく。

ジェニファー 「ぎゃああああ…！」

ジョン 「ジェニファー…！」

鈴木 「ジェニファー迂闊過ぎるだろう！」

ジョン 「見てるか皆…！皆の仇を…討ってやるぜ!!うわああああ…！」

ジョン、けっこうしぶとく戦い続ける。それはもうけっこう長く戦い続ける。

鈴木 「…：強いねジョン。粘るね」

ジョン 「はあはあ…：全てのゾンビを倒してしまった」

鈴木 「強いね!!え?じゃあゾンビ全滅?こんな結末なことないけど…：え?どうすんのこれ?」

ジョン 「うん?（下手側を見る）」

下手からジェニファーとマイケルがゆっくりと入ってくる。

ジョン 「2人とも！無事だったのか！」

鈴木 「え？ジェニファーとマイケル？マジで？ご都合主義すごいけどこれ…ハッピーエンドに向かっている…？」

ジョン 「よかった！ゾンビの群れに襲われた時はもう駄目かと思ったけど！」

鈴木 「いやいやでもこれ、怪しくない？」

ジョン 「どうやって助かったんだ？」

鈴木 「これもしかして…2人ともゾンビになってるんじゃないの？」

ジョン 「どうしたんだ？なんか暗いな？冷めたミートパイみたいになってるぞ」

鈴木 「全然ピンとこない例え！というか怪しさがすごいよ！この2人！ゾンビになってるんじゃないのー！？」

ジョン 「ジェニファー…あの時の続きを、しようか」

鈴木 「駄目じゃない？近づいちゃ駄目じゃないの！？どっち！？どっちなの！？2人が振り向くとそこにはゾンビに噛まれたあとが、」

ジェニファーとマイケル、後ろを振り向く。しかし何もなっていない。

鈴木 「無い！無い！？…え？嘘」

ジェニファー 「ジョン…無事でよかった」

鈴木 「マジで？ハッピーエンド？」

マイケル 「今夜は…パーティーだ」

鈴木 「これってハッピーエンドじゃない？描けたじゃないですか…」

ジョン 「これから…3人で平穩に暮らしていこう」

鈴木 「環先生！ハッピーエンド描けたじゃないですか！」

ジェニファー 「ええ。平穩に…暮らしましょう（注射を取り出しジョンに打つ）」

鈴木、顔をジェニファーに向ける。倒れるジョン。すぐに起き上がるがその様子はおかしい。

ジョン 「ヴアアアア…」

マイケル 「新人類計画の実験、第一フェーズ完了だな。今回のバイオハザードで大量のデータが採れた。途中から彼を1人にさせ観察していたが実際この男は1人でよくやってくれたよ。褒美に、新人類へ進化できる薬物被験体1号という名誉をキミに与えてあげよう」

ジェニファー「愛しているわジョン。可愛いジョン。平和を望むジョン。大丈夫。私があな
たを愛し続けてあげるわ、ずーっとね」

ジョン「ヴ、ア、アアアア…」

3人、はける。

環「…描けたよ、ハッピーエンド」

鈴木「描けてない！バッドエンドですよ！馬鹿！」

環「え？だって2人とも愛し合ってるよ？」

鈴木「いやだいが歪んでますよ、この愛」

環「そうかあ…また駄目だったか…」（落ち込む）

鈴木「い、いやまあでも、途中まではけっこう良いところまでいっていたと思います
よ！」

環「…ばあー！」

鈴木「立ち直り方も漫画。でもやっぱり途中まではよかったです。その、先生は最後の
最後に余計なひねりを加えてしまうのが、良くないのだと思うんです」

環「そんなひねり、加えてる？」

鈴木「もうグイッと、ひねってますよ。いえですからそうならないために、もう早い段
階でスパッと終わらせちゃった方が良いと思います」

環「なるほどねー。分かった。次はちよつと意識してみるよ」

環、タブレットを持って鈴木の話に合わせて描き始める。ピッチャー、キャッチ
ャー、マネージャー、運転手が合わせて舞台に出てくる。

鈴木「はい。では3度目の正直です。設定は、熱いスポーツものにしませう。見事甲
子園で優勝を果たした主人公達。主人公のピッチャーとその弟のキャッチャー、
そして幼馴染のマネージャー。3人は各々が持つこれからの夢を語り合いなが
ら歩いているん、」

そこにトラックが突っ込んでくる。ピッチャーとキャッチャーが吹っ飛ばす。

鈴木「トラック！なんで！？バッドエンドが早い！私まだ設定すら喋り終えてないで
しょう！いやスパッと終わらすってそういうことじゃないですから！」

倒れるピッチャーとキャッチャー。マネージャーがニヤリと笑う。

鈴木「マネージャー、なんでニヤリと笑った？まさかお前がこの事故の黒幕か？おい？」

運転手、マネージャー、キャッチャーはける。起き上がるピッチャー。

ピッチャー「…夢か」

鈴木「夢オチ？嘘でしょ？まさかの夢オチ？」

そこにトラックが突っ込んでくる。ピッチャーが吹っ飛ぶ。

鈴木「トラック！再びのトラック！トラック好きか！」

運転手「…ゆ、夢か（動揺しながら）」

鈴木「あんたのは夢じゃないよ。人をひいた現実を受け入れなさいよ。じゃない！もう良いですよ！やめやめ！なんかもうバッドエンドかどうかも分からないですよ！」

環「ということはつまり…ハッピーエンドということ？」

鈴木「違いますよ。それだけは違いますよ。なんでこんな結末にしちゃうんですか！」

運転手とピッチャー、はける。

環「うーん…鈴木君。こんなタイミングで言うと思わせてもらえないかもしれないけど」

鈴木「なんですか？別に信じますよ」

環「私、本当はハッピーエンドを描きたいの」

鈴木「嘘だよ。それは嘘ですよ」

環「ホントなんだよ。実は私今…バッドエンドしか描けない体になってるのよ」

鈴木「え？どういうことですか？」

環「まだプロになる前に『皆のお絵描きサイト』に漫画を投稿してたって言ったでしょ？」

鈴木「はい」

環「あの頃は好きってのもあって、ありきたりなハッピーエンドばかり描いててさ。

でも全然評価してもらえなかったのよ。それでまあある日、ムシヤクシヤしてもすごく後味の悪いラストの漫画を描いたんだよね。でもそれが、なんと一部の読者に人気出ちゃってね」

鈴木「確かに、そういう後味悪いのが好きな人もいますからね」

環「それからの私はさ、とにかく一部の人も良いから評価されたくて、今度はそんなラストばかり描き続けたよ。ひたすらね。そしたらいつの間にか、結末がバッドエンドしか描けない体になってさ。もうハッピーエンドが描けなくなっ

てた。というか今や、自分の描いた結末がハッピーなのかバッドなのかも分からなくなってしまうているー！」

鈴木「それは、重症ですね…」

環「でもま、描き続けたおかげで描くスピードは速くなったし、中身のストーリー自体は面白いって評価されるようになって、ダッシュの編集さんからオフアワーを頂いたんだよねえ」

鈴木「編集もまさか先生がバッドエンドしか描けないことになってるなんて夢にも思わないでしようからね…」

環「すぐにその話は受けたよ。単純に嬉しかったし、それにダッシュで熱血王道漫画を描けば、またハッピーエンドを描けるようになる気がしてさ。実際ここまではよく描けてたと思うのよねー」

鈴木「勿論です。ここまで本当に素晴らしい漫画でした」

環「ありがと。だから分かってるよ。この漫画は何がなんでも、誰もが認めるハッピーエンドを描かないといけないってことくらい、さ。だから今も『皆のお絵描きサイト』で漫画投稿してんだから。もう一度ハッピーエンドが描けるようになるために、リハビリしてんの」

鈴木「今の結果をみるとまだバッドエンドしか描けないみたいですけどね」

環「そういうこと言うなよー」

鈴木「冗談です、すみません。でも先生のお気持ち分かりました。だったら頑張りますよ、2人で。私もとことんお付き合いしますよ。絶対この漫画、ハッピーエンドにしましょうー！」

環「うん」

鈴木「というかハッピーエンドにしないと私も上から怒られちゃいますからー！」

環「ふふ…それは知らんけど」

鈴木「先生…！」

環「ありがと、鈴木君。なんか、大分編集者っぽくなったね」

鈴木「恐縮です。それでは早速打ち合わせを再開…するよりはちよっと、まずは先生が思うままに描いてみましょうか？ラフで良いので」

環「そうしてみるか」

鈴木「1ページ1コマずつ注意して慎重に、ハッピーエンドを意識して描いていけば、きっと大丈夫ですよ」

環「うん（描き始める）」

鈴木「まずは冒頭です。（環が描いているのを見ながら）ふんふん、そうそう、主人公達がね、ボスと握手して、良いですね。笑い合い、今までのことを振り返っていると、そこにトラックが突っ込んでくる。はい、描き直しましょう」

環「でもこれトラックじゃないよ」

鈴木「え？」

環「タントだよ」

鈴木「どっちでも同じですよ」

暗転。

【2幕】

明転。

舞台下手側にハヤト、上手側に暗黒太郎がいる。

ハヤト 「さあ！お望み通りお前の用意したバトルフィールドに来てやったぞ！暗黒太郎！」

暗黒太郎 「待っていたぞ隼人。このメンコフィールドで最後の戦いを始めよう。そして貴様をくだし、貴様の持つ伝説のメンコ、レジエントを頂く。そう今日ここで私は、9つのレジエントを揃えることができるのだ！」

ハヤト 「お前は…9つのメンコを集めた力で、何をしようというんだ？」
暗黒太郎 「しれたこと。その絶大な力、メンコパワーにより、私はこの世界を征服する！この世の全ては…私の手中となるのだ！」

ハヤト 「そんなことは、絶対にさせない！俺は、絶対にお前を倒す！」

暗黒太郎 「くつくつく…！ならば貴様のメンコパワー！私に見せてみる！」

威圧感を出す暗黒太郎。

ハヤト 「くっ！なんて威圧感だ…！これが悪のメンコ組織総督、暗黒太郎…！本当に…俺

1人で勝てるのか…！？」

暗黒太郎 「所詮貴様など、仲間がいなければ何もできはしないのだ！」

サヤカ 「負けないで」

メンコを握るサヤカが真ん中から出てくる。

ハヤト 「この声は…サヤカちゃん！なんで？このメンコフィールドには俺達以外誰も入ることができないのに…！」

サヤカ 「ハヤト君だったら、絶対大丈夫だよ（メンコをさらに強く握る）」

ハヤト 「（メンコが光る）そうか…！メンコを通じて想いが伝わっているんだ…！ありがとう！サヤカちゃん！」

テツロウ 「ハヤトさんに弱気は似合わないんだな」

ジン 「そんな弱気なら、俺様が代わりに戦ってやろうか？」

真ん中からメンコを握るテツロウとジンが出てくる。

ハヤト 「この声は…テツロウとジン！」

テツロウ「早く帰ってきて、また一緒にメンコファイトするんだな」

ジン「お前はこの俺様に勝ったんだ。違う奴に負けることは絶対に許さない」

ハヤト「ありがとうテツロウ！そしてジン！皆の…地上にいる皆の熱い思いがメンコを通して伝わってくるぜ！」

暗黒太郎「ふ。何やらお友達から元気をもらったようだが、ふふ、所詮はガキの集まりよ」

ハヤト「確かに俺達はまだ、小学生だ！いやあいつ（ジン）だけは、中学生だ！でも俺達の心、メンコソウルは誰にも負けない！たった1人のお前なんか、絶対に負けるもんか！」

暗黒太郎「もう良い…無駄話はこので終いだ。やはり我々はこれで語るしかないようだ」

サヤカ「負けないで…ハヤト君」テツロウ「負けちゃ駄目だ、ハヤトすわーん」ジン「負けんよ、ハヤト」

サヤカ・テツロウ・ジン、はける。バチバチと視線を送り合う、ハヤトと暗黒太郎。

ハヤト・暗黒太郎「メンコファイトゴー！プレスファイブ！メンコ！フリーセット！」

ハヤトと暗黒太郎がせっせと舞台中央にメンコを置き出す。

暗黒太郎「ほう…超攻撃型のメンコ配置か」

ハヤト「フェニックスドラゴンスタイルだ」

暗黒太郎「良い名前だ、面白いぞ隼人！では私の先攻からだ！奥義！プレスクラッシュャー！」

ハヤト「何！？ファーストプレスからのプレスクラッシュャーだって！？」

ナレーション『プレスクラッシュャー。メンコファイトが始まった数千年前より受け継がれる奥義。最大限に高く上げた腕より落とされる一撃は受けた相手を精神的にも重圧の底に叩き落とすことができる。プレッシュャーという言葉はこの奥義からきているという説もある』

ハヤト「くっ！重い…！」

古澤「大丈夫だよハヤト。お前なら」

メンコを握る古澤が下手から出てくる。

ハヤト「メ、メンコファイター！あなたの声まで！」

古澤「俺の教えを全て習得したお前なら、誰にも負けはしない。それでも不安な時は、いつでも俺がお前にエールを送ってやるさ！」

ハヤト「ああ…！ありがとう、メンコファイター！うおおおおお！！！！」

ハヤトと暗黒太郎、メンコを持ちながら上手側へはける。1人舞台に残る古澤。

古澤「頑張れハヤト！お前なら絶対に勝てる！ハヤト、」

古澤のスマホに電話がかかってくる。

古澤「うるさいな今盛り上がってるのに、（スマホを見る）あ、ヤバい。（電話に出る）はい、お疲れ様です。はい、はい。あ、分かりました。もう少しで皆さんここに集合するんですね。はい、それでは準備して待機しております。はい、お疲れ様です」

古澤、メンコをしまい仮面を取り出し顔に付け、正面を向いている。そこに古澤と同じ仮面を付けたジャッジマンも入ってきて、古澤の隣に立つ。山田↓久米島↓野長↓斉藤という順番に舞台に出てくる。

斉藤「こ、ここが次の会場かな？や、山田さん」

山田「つち！おどおどするな斉藤」

久米島「きっひっひ」

野長「……」

古澤・ジャッジマン（以下ジャッジ）「皆様、よくぞこの第7会場へお集まりになってくださいました。ジャッジマンです」

古澤「皆様、『ジーニアスゲーム』1回戦は如何でしたでしょうか？裏世界の天才方には少し生ぬるかったでしょうか？」

山田「御託は良い。さっさと始めろ」

ジャッジ「それではこれより『ジーニアスゲーム』、第7会場第2回戦を始めたいと思います。皆様、1回戦終了後に配られたハートのメダルはお持ちですね？」

4人、ハートのメダルを取り出す。

古澤「今から第7会場にいる10人で、このメダルを賭けゲームをしてもらいます。そしてメダルを5つ手に入れることができれば次のゲームへ進むことができます」

山田「つまり、この会場から勝ち上がれるのは2人ということか」

斉藤「ふ、2人！？絶対残れないよ」

山田「騒ぐな黙れ。お前の分のメダルも集めてやる。お前を勝たせるのが契約だからな」
斉藤「や、山田さん！」

久米島 「きっひっひ。そう上手くいくかなあ？」

野長 「……」

ジャツジ 「それでは今からゲームのルールを説明致します」

古澤 「ゲーム名は『バンバンペー』。1対1のゲームです。皆様は『バンバンペー』のかけ声、手拍子と共に『ブロック』、『アタック』、『チャージ』3つの中から1つを選択し提示していきます。このゲームは相手が『チャージ』を提示している時、自分が『アタック』を提示していれば勝利となります。ただし『アタック』を1回行うには『チャージ』を1度行わなければなりません。そして『アタック』は『ブロック』で防ぐことができます。なお、1度のゲームで3回戦って頂き、2回勝利した方が勝者となります」

山田 「なるほど。確かに複雑なルール設定…だが、全て理解できた」

斉藤 「え、えー？こんな複雑なルール、1回で理解できる訳ないよー」

久米島 「きっひっひ。僕も理解できた。この適度で偉そうにするのはやめろ」

斉藤 「キミ（野長）は分かったかい？」

野長 「……（斉藤を見るが何も言わないで再び正面を向く）」

斉藤 「分かってないみたいだね！」

野長、素早く斉藤に顔を向ける。

ジャツジ 「それでは一度我々ジャツジマンでデモンストレーションを行います」

古澤とジャツジマンが淡々と『バンバンペー』（小学生の頃流行っていた懐かしのゲームのこと。「パンパンビーム」で検索すると出てくると思います）を行う。

古澤が負ける。

古澤 「負けました。以上でデモンストレーションは終了です。それでは皆様、各々で対戦者を決め、ゲームを開始してください」

ジャツジ 「我々は別室で様子を見ております。くれぐれも不正はしないよう、お願いします」

久米島 「その通りだあ。不正は良くないぞ」

山田 「ふん、良く言うぜ久米島」

久米島 「何だところよし、決めたあ！山田！お前は僕のメインディッシュだあ！まずは他の雑魚を頂き、最後にお前を頂くう！僕と戦うまで、絶対に負けるなよお？」

久米島、下手へはけていく。

古澤 「皆様、賞金8兆円のために頑張ってくださいませ」

斉藤「だ、大丈夫なんですか山田さん？」

山田「ふん、安心しろ。このゲーム、『バンバンペー』には…必勝法がある！」

古澤とジャッジマン、上手方向に足踏みし山田、斉藤、野長の3人はそのまま下手へはける。

ジャッジ「ふいっお疲れ。キミ、ちょっと早いけど昼休憩入っちゃって良いから」

古澤「あ、分かりました」

ジャッジ「この後もまだ俺、ジャッジマンのシフト続くから」

古澤「お疲れ様です」

ジャッジ「じゃあまた昼休憩後、頼むわ」

古澤「はい（仮面を外す）」

ジャッジマン、真ん中へはける。古澤、しばらく足踏みしている。

古澤「さてと…今日はどこで昼飯食おうかなって」

OLが下手から入ってくる。

古澤「あれ？あの人はいつも良く見るOLさん…？」

OLにスポットライト。

OL「今日はあろうことか朝ごはんを抜いてしまった。ので、今日のお昼は何よりも量を食いたいわ。でも食後はゆっくりお店の中で仮眠もとりたい。矛盾するような2つの要望を解消してくれるお店はないものかしら…あった！喫茶店『まいるど』！今日はここに決めた」

OL、真ん中からはける。

古澤「独り言の声大き！全部声出たけど…でも喫茶『まいるど』か。俺も久しぶりに入ってみるか」

古澤も真ん中からはける。下手からテーブル2つと椅子3つを持った店員と店長が入ってくる。その後、真ん中からOLと古澤が入ってきて椅子に座る（席は離れている）。

店員「いらっしやいませー」

古澤「この店、喫茶店とは思えないほどとにかくメニューが豊富なんだ。サンドウィッチだけで12種類もありやがる」

店長「さてさてお客様方。メニューを迷い過ぎて、お昼休みが終わらぬようお気を付けて」

店員「それではご注文お決まりになったら、そのボタン、」

OL、ボタンを押す。店内に響き渡る『ピンポーン』の音。

古澤「早い…!」

店長「ほう…」

OL「昔ながらのナポリタンを1つ」

古澤「昔ながらのナポリタンだと…?あのOL、知らねえのかこのナポリタンを…!」

店長「ほっほ。女性がうちのナポリタンか。あまりの量の多さに、椅子から転げ落ちなければ良いが」

OL「大盛で」

古澤・店長「大盛!?!」

古澤と店長、椅子から転げ落ちる。

店員「大丈夫っすか?」

OL「それと、中濃ソースを別の器に入れてきてくれないですか?お願いします」

店員「はい?中濃ソースっすか?分かりました」

店員、下手からはける。

古澤「ソース?どういうことだ?いやそれよりも大盛の件だ。あのOL…」

すぐにお盆を持った店員が出てくる(背中には大きなナポリタンの写真が貼つてある)。

店員「お待たせしやしたー」

OL「来た来た〜!この量よ!この量!」

古澤「口ではなんとでも言えるさ」

OL「まずはソースをかけて〜」

古澤 「はっ！そ、そうか！この喫茶『まいるど』のナポリタンは鉄板焼き……！」
店長 「そこにソース、しかも中濃ソースをかけることにより……！」

OL、器に入っているソースを鉄板にかける。『ジュワッ』という音がする。

古澤 「鉄板に少し焦げたソースの匂いが……！」

OL 「これこれ〜！良い匂い。実はナポリタンにソースはよく合うのよね〜。それじゃあ、頂きまーす（食べ始める）」

古澤・店長 「ば、馬鹿！まだ早い！（立ち上がる）」

OL 「あふい！」

古澤 「ほら見ろ！」

OL 「（それでも食べ続ける）あふい！熱い！熱い！はふ！熱い！はふ！熱い！……美味
い」

古澤・店長 「ごくり」

OL 「うーんこの熱さもたまらんね」

古澤 「マ、マスター！俺もあれと同じやつを頼む！」

店長 「か、かしこまりました」

店員 「俺も今日のまかないはナポリタンにしよーっと」

店長、下手からはける。すぐにお盆を持った店長が出てくる。

店長 「お待たせしました」

食らいつくように食べ始める古澤。その横で颯爽と立ち上がるOL。

OL 「今日もご馳走様でした」

店長 「ペ、ペロリと平らげておる……この女……胃袋が宇宙か……？」

OL 「マスター、お会計をお願いするわ」

店長 「は、はい〜」

OL、会計を済まし真ん中からはけようとするが立ち止まる。

OL 「あ、お店の中で仮眠とるの、忘れてたわ……とほほ……」

OL、しょんぼりしながら真ん中からはける。古澤も食べ終わる。

古澤「ふうー。また今日もあのOLと同じものを食べてしまった…さて、まだ休憩時間がけっこう残ってるな。一旦家に帰るか」

古澤、真ん中後ろへ移動する。店長と店員、テーブルと椅子を持ってはける。舞台中央にハト次郎（頭にハトの帽子をかぶっている）と黒子が出てくる。※黒子は1〜4が書かれている看板を持っている。コマ（シーン）が進むごとにその数字の看板を上げる。
下手から古澤が入ってくる。

黒子「くるっくハト次郎！」

①古澤「ただいまーハト次郎」

②ハト次郎「ご主人…！」「くるっく…！」

古澤「うん？」

③ハト次郎「あなたに拙者の命を救ってもらってから早数カ月…！」「くるっく、くっく、くっく、くるっぼぼぼぼ、ぼぼるーるー…！」「恩を返したいと常思っておりますが、その機会が訪れず誠申し訳ないでござる…！」「くるっぼ、ぼっぼ、ぼーぼーぼー、くるっく、くっく、くるっぼう…！」

④古澤「うん、何言ってるか全然分かんねえや」

黒子「くるっくハト次郎！」

①ハト婆（頭にハトの帽子をかぶっている）が上手から出てきて、窓を叩く。

ハト次郎「（ハト婆に気付く）むむ？外にいるのはハト婆ではないか」

②ハト婆「ハト次郎様や…」

ハト次郎「うん？」

③ハト婆「あなた様はハト王国の第2王子。いつまでもこんな下等な人間の元にいる必要はありませんぞ！さあ！今日こそワシと共に国へ帰りましょう…若！」

④ハト次郎「ハト婆…窓の外だから何言ってるか全然分かんぞござる」

黒子「くるっくハト次郎！」

①古澤「今日も来てるよあのハト（窓を開けてあげる）」

ハト婆「もし、その人間や」「くる、くっくくるっぼう」「聞くがいい」「くっくくぼう」

②古澤「あれ？なんか苛立ってるのかな？」

ハト婆「ハト次郎様は高貴な存在…！」「くるっく、くるぼう…！」「貴様ごときにきやくお世話ができると思わないでもらいたい！」「くるっくくぼくーぼくるっぼぼぼう！」

③古澤「とりあえずエサでもあげよう（エサを地面に落とす）」

ハト婆「くるっくー（エサを食べる）」

④ハト次郎「食べるんかい」

黒子「くるっくハト次郎！」

①ハト婆「ごほ、ごほ。老婆の体は新種のばい菌に蝕まれておるのじゃ…」

ハト次郎「ハトの体はばい菌まみれだから自分達が蝕まれることはないでござるよ」

②ハト婆「病気作戦も失敗、か。仕方がない。今日のところは帰るとしようかのう」

ハト次郎「すまぬな、ハト婆」

③ハト次郎「しかし、途中までは一緒にハト婆を送るでござるよ」

ハト婆「若…」

④下手へはけていくハト次郎とハト婆。

古澤「夕飯までには帰ってくるんだぞー」

ハト次郎「くるっくー」

黒子「次回もお楽しみに！」

黒子もはける。

古澤「さて、もうこんな時間か。そろそろジャッジマンのバイトに戻るかな。いや、その前に一回メンコを握ってハヤトにエールを送っておかないと」

漫画の神が上手から出てくる。

漫画神「ふむ。順調そうだな」

古澤「あ、神様」

漫画神「4つの漫画に何か問題は起きていないかな？」

古澤「今のところ特に問題ありませんよ」

漫画神「それは何より何より。流石は私直々に生み出したサブキャラクター、優秀だな」

古澤「いやーしかし同じキャラクター『古澤太郎』として4つの物語を掛け持つのは流

石にキツイですね」

漫画神「そうか…しかし本当に助かっているぞ。この世界が漫画だとちゃんと分かっているサブキャラがいるだけで、物語がスムーズに進行するからな」

古澤「はい。まあ4つも掛け持つとちょっとこんがらがってきましたが」

漫画神「さて。そんなお前の頭を整理するために、今日はこんなものを作ってみましたぞ」

映像が始まる。

映像音声『この世には漫画界という世界が存在している。それは人間が描く漫画1つ1つに

存在する。漫画の神様はその漫画界を1人につき1つ管理していた。しかし近年、web誌、ネットの投稿サイト等プロアマ問わず簡単に漫画を描ける環境により漫画の数が急増加。それにより漫画の神様は1人で複数の漫画作品を担当することになってしまふ。この厳しい状況に神様は、自分達のフォロワーとして、漫画内を自由に動けるサブキャラクターを生み出した。現在、人間の描く漫画の世界は神様とサブキャラの二人三脚で支えられている。そう、よく漫画の作者は、キヤラが勝手に動いて物語ができていくなんてことを言うが、その言葉は本当なのだ。実際に中で神やサブキャラがしれっと動いて物語の流れをちよこちよこと変えているのだ。そして、私こと漫画の神72号とサブキャラクター古澤は4つの漫画を担当している！【ペンネームわか作、本格熱血ホビーバトル、メンコファイトゴー】【ゆるゆる子作、OLがただご飯を食べる、OLのぐるめ】【ホワット隆作、ハトの擬人化ほのぼの4コマギャグ、くるつくハト次郎】【天童院司作、本格知略ゲーム、ジーニアスーズゲーム】以上4つの漫画だ！因みにこの4つの物語、漫画としてのジャンルは全て異なるが、1つの同じ世界に存在している！つまり、世界をかけたメンコバトルがはるか上空で行われている裏で、大金をかけたバンバンペーが地下深くで行われ、ただの地上のただの喫茶店でのOLがご飯を食べ、ハトはハトでなんか色々大変なのだ！』

古澤「とても分かりやすい映像、ありがとうございました。しかし神様、今更なのが」

漫画神「なんだ？」

古澤「今の映像でもありましたが、この4つの漫画の世界は1つの同じ世界じゃないですか」

漫画神「そうだな。だからお前も4つの漫画を自由に動ける訳だが」

古澤「それによって何か、良くも悪くも漫画同士が影響し合ったりしないんでしょうか？」

漫画神「漫画ごとに作者もジャンルも違う。そんな漫画同士が影響し合うことなど滅多にない」

古澤「それなら良いのですが」

漫画神「なぜ今更そのような心配を？」

古澤「いえ、一応確認を。もうすぐ終わりそうな漫画があるので」

漫画神「ほう、気付いたか」

古澤「そりゃあ分かりますよ。今クライマックスじゃないですか」

漫画神「その通り。【メンコファイトゴー】…【OLのぐるめ】」

古澤「うん？」

漫画神「くるつくハト次郎】【ジーニアスーズゲーム】、全て終わってしまうな」

古澤 「は？全て終わる？」

漫画神 「うむ、全て」

古澤 「いやいやいや！ええ！？4つの漫画全部がちょうど終わるんですか！？」

漫画神 「うむ、ちょうど」

古澤 「え、何そのタイミング！？」

漫画神 「やっぱり、全部1つの同じ世界だと何かこう見えないところでお互いに影響し合っちゃったのかなー？」

古澤 「ついさつき影響しないって言ったばかりじゃないですか！」

漫画神 「しないとは言ってませーん。滅多にないって言いましたー」

古澤 「反論が小学生ですよ」

漫画神 「古澤君。以前より言ってきたが、キミにお願いがある。これより4つの漫画全ての結末をハッピーエンドで終わらせてほしい（良い声で）」

古澤 「急に真面目にこられても。全漫画同時に結末をハッピーエンドにするんですか？」
漫画神 「うむ、私72号は無類のハッピーエンド好きだからな。そのためにキミを生み出したと言っても良い。バッドエンドな展開になりそうな漫画があったら、強引に

でも良いからそれを打ち消すのだ」

古澤 「ただ4つ掛け持っただけでもしんどのに…」

漫画神 「大丈夫だ。私もお前をアシストする。お前をきちんとフォローするぞ」

古澤 「ホントですか？」

漫画神 「勿論だとも。実行隊は古澤、私は外からそれをナビゲートする。それに私には、漫画の神のみが使える秘密の技をいくつも持つ。その数72号にちなんで、3つだ」

古澤 「ちなんでないですけど、そんな秘技があるのですね」

漫画神 「うむ。さあ古澤、そろそろ覚悟を決めろ」

古澤 「分かりました…やるだけやってみますよ」

漫画神 「頼むぞ。さて、物語は待つてはくれない。このままミッション…スタートだ」

ハヤトが下手から暗黒太郎が上手から出てきて、台詞まで戦いのマイム。古澤と漫画神は上手後方にいる（基本位置）。

漫画神 「まずは『メンコファイトゴー』。先ほども言った通りあと二回で終わりだ。少年誌に掲載、しかも円満終了、まあ何もしなくてもほぼ確実にハッピーエンドだ。

お前は自分の出番に顔を出すだけで良い。出番になったら私が呼ぶから」

古澤 「そんな簡単で良いんですか？」

漫画神 「心配するな。保険としてこの作者にはすでに先手をうっている、神の秘技その1つ、ゴッドレターを使っただけ」

古澤 「早速出ましたね神の秘技…！いったいどんな技なのですか？」

漫画神 「…作者に直接ファンレターを送ることができる」

古澤 「思ったよりスケール小さかった」

漫画神 「ファンレターの力をなめるな！私は物語中盤から定期的に送り続けていた。しかも」

古澤 「しかも？」

漫画神 「病気の子供を装ってな」

古澤 「やるのが汚い！」

漫画神 「流石に病気の子供から元気をもらっていますと言われ続けていればハッピーエンドになるだろう」

古澤 「じゃあもう全ての作者にそうやって送れば良いじゃないですか」

漫画神 「馬鹿め…他の漫画は3つとも青年誌だ！病気の子供が読むのはおかしいだろ！」

古澤 「その辺はリアルに考えているんですね」

暗黒太郎 「ハヤト…いつまで守りのメンコを続けるつもりだ？この私が恐いか？うん？」

ハヤト 「舐めやがって…！だったらお望み通り、攻めのメンコへチェンジしてやるぜええ！」

漫画神 「さあ、出番だぞ」

古澤 「はい。(舞台中央後方へ行き、メンコを握る) 待つんだハヤト！」

ハヤト 「(メンコを落とす寸前の態勢で止まる) メンコファイター!？」

古澤 「相手の挑発に乗っては駄目だ。頭はクール心は熱く、だよ」

ハヤト 「そうだった…！ありがとうメンコファイター…！俺はまだまだ守りを続けるぜ、

暗黒太郎！」

暗黒太郎 「ちい…！」

ハヤトと暗黒太郎が戦いながら下手へはける。上手後方へ戻る古澤。OLが真ん中から出てきて台詞までマイム。

漫画神 「次に『OLのぐるめ』。この漫画は展開もマンネリになってきたということで、

そろそろ新しい物が描きたいという作者の要望もあり、終了となる」

古澤 「それじゃあこれも一応円満終了ですね」

漫画神 「そうだな。そして今回は最終回ということで、1つのお店ではなく会社の帰りに寄ったお祭りの出店を回るようだな…1人で」

古澤 「はい」

漫画神 「1人…悲しいな」

古澤 「今更ですか。あのOL何十話1人でご飯食べてきたと思ってるんですか」

漫画神 「しかしこのままだと『こうして明日も私のぐるめは続いていくわ…1人でね』み

「たいになりそうだ…可哀想」

古澤 「そういう風に言うから。別にそれでも良くないですか？」

漫画神 「嫌だ嫌だ！そんなちよつと切ない終わり方じゃなくて、もっとザ・ハッピー！みたいな感じにしたーい」

古澤 「…それではどうするんですか？」

漫画神 「いやだからほら、あのOLが行くお店の先々で偶然いつもいるだろう？なんか、冴えない男が」

古澤 「俺ですけど。冴えないってなんですか」

漫画神 「そいつとなんかほら、良い雰囲気になって終わってほしいなーって」

古澤 「え？」

漫画神 「ひゅー（口笛）」

古澤 「口笛。いやそれは難しくないですか？だって作中で一度も会話したことないですもん」

漫画神 「あ…確かに会話はないな。いつもお前が、変なリアクションとってるだけか」

古澤 「言い方」

漫画神 「まあとにかく恋愛フラグ的なものを立ててこい。お祭りにいる女なんて大体エロいことしか考えてないから」

古澤 「偏見がすごい。でもフラグだったって…」

漫画神 「大丈夫。あのOLもこの漫画の作者も女、乙女だ。ときめいたものを望んでいるさ」

OL 「色んな出店が出てるわね。でも、いきなり食べ物を購入するのはNG。まずは出店のルート確保に徹するの。そしてきちんとした順番で出店を周り、計画的に食べっていくのよ」

屋台の人Aが下手から出てくる。

屋台の人A 「焼きトウモロコシだよ！焼きあがったばかりだよ！」

OL 「1つちょうだい！」

古澤 「買うの？」

屋台の人A 「はいよ」

OL 「うーん！やっぱり焼きたてが一番ね…馬鹿ー！早速やっちゃったーい！匂いにやられたー！くうー！お祭りマジック！」

古澤 「あんな人と恋愛フラグ立てるんですか？」

漫画神 「良ーい女じゃないか。羨ましい。ほら行ってこい」

古澤 「えー…」

古澤、OLの方へ歩いていき2人、すれ違う。古澤そのまま下手へ歩き、軽く振り向く。

古澤「あれ？あの人…もしかしていつものOLさん？」

古澤、そのまま下手へはけ、上手から出てくる。

漫画神「それだけ？おい、それだけか？及び腰かおい」

古澤「まずはこれだけです！まずは！いやここから徐々に積み上げていきますので！」

OLも軽く後ろを振り向き、上手へはけていく。

古澤・漫画神「振り向いた…」

古澤「あつちも俺に気付いたのか…？」

漫画神「お前の行動で作者も恋愛フラグを立てにきたのか…？」

古澤と漫画神、顔を見合わせ、固い握手をする。

ハト次郎、ハト婆、黒子が真ん中から出てくる。

黒子「くるつくハト次郎」

漫画神「おっと、お次はほのぼの4コマギャグ、『くるつくハト次郎』だな」

古澤「緩い雰囲気が好きでしたけどこれも終わっちゃうのか。これも円満終了ですか？」

漫画神「載っている雑誌が廃刊になるから終わってしまう」

古澤「けっこう悲しい終わり方だった…」

①ハト次郎「それではハト婆、拙者はこの辺で」

古澤「とは言え4コマのほのぼの漫画ですし、そんなバッドエンドとかはなさそうですが？」

漫画神「うむ、急な展開等はないだろう。4コマだし、無難に終わってくればそれで良い」

ハト婆「名残惜しいのう…若よ！（ハト次郎を隠しナイフで斬ろうとする）」

ハト次郎、ハト婆の方を向く。

②ハト次郎「ハト婆…！？それは一体何の真似でござ、は…！…貴様、ハト婆ではないな？」

ハト婆「ほう…察しが良いね。べりべりべり…！（頭のハト婆帽子を取ると、別の鳩帽子が出てくる）あたいはお前の兄貴に雇われた、殺し屋鳩さー！」

③ハト次郎「ハト婆に変装していたでござるか…！何が目的でござる！？」

殺し屋「ふん、お前の兄貴は恐れているのさ。お前が王に立候補することをね！だからここで…あたいがお前を始末するのさ！」

④古澤、下手へ移動する。

古澤「窓を見ながら）風が強くなってきやがった…」

古澤、上手後方へ戻る。ハト次郎、ハト婆、殺し屋、真ん中からはける。

古澤「何これー！？何この展開！？」

漫画神「…何これー！？」

古澤「あなたも動揺するのかい！なんか思ってたよりシリアスなことになってますけど！」

漫画神「ほのぼのギャグマンガがシリアスに入っても確なことがないのに」

古澤「作者さん、最終回だからって変なことやらなくても良いのに」

漫画神「しかしこれは逆にチャンスでもある」

古澤「え？」

漫画神「このシリアス展開を感動系に変化させられれば、最高のハッピーエンドを迎えることができる。とりあえず、何とかこちらからも物語へ干渉できるようにしたいな」

古澤「…そうだ！だったら、まだ黒子がいるので、ちょっとさっきの四コマ目に台詞を追加してきます…！黒子さんちよっと待って！行かないで！」

古澤、急いで下手へ移動する。

④古澤「風が強くなってきやがった…！心配だな、探しに行くか」

漫画神「ほう、これでハト次郎達と絡みにいけるという訳か」

古澤、ゆつくりと上手後方へ移動し漫画神と固い握手をするが漫画神、余計な動きを付ける。ついていけない古澤。黒子、はける。

古澤「いやさっきそんなのなかったでしょう」

山田、久米島、斉藤、ジャッジマンが舞台に集まる。

久米島 「きっひっひ…！」

漫画神 「そして最後は『ジーニアスズゲーム』…この漫画が終了する理由は…：人気がないよ」

古澤 「ただの打ち切りかい」

漫画神 「いやだってこの漫画、色々酷いからな。まずタイトルがだせえ。『ジーニアスズゲーム』って。天才達の頭脳戦、みたいにしたかったのだろうが、『ジーニアスズゲーム』ってえ…だせえー」

古澤 「全12回戦ゲームがあって、今2回戦が始まったばかりですけどね」

漫画神 「『バンバンペー』って…なんか仰々しく説明していたが、あれ子供がやってる手遊びだもの…」

古澤 「あれで作者、真面目に描いているみたいですよんね…」

漫画神 「それゆえネットでもよく叩かれている。しかしこんな漫画でも私はハッピーエンドにしたい。だがこのままでは、ネットで叩かれ続けトドメの打ち切り宣告で自暴自棄になってしまった作者の手により、最悪のバッドエンドになってしまう」

古澤 「え？分かるのですか？」

漫画神 「神の秘技その2、ゴッドアイ」

古澤 「え？」

漫画神 「ゴッドアイとは、見た作品の様々な情報を得ることができる。それは未来、このまま進行すると訪れる結末もな」

ジャッジ 「それでは山田様と久米島様、メダル5枚ですので勝ち抜けです」

斎藤 「そんな〜」

山田 「待て、久米島。今からお前のメダル5枚を賭けて、俺と戦え」

久米島 「はあく？僕がそんな勝負に乗るメリットはあるのかーい？」

山田 「俺はこのゲームに、メダルではなく命を賭ける。どうだ？」

久米島 「きっひっひ。文字通り僕がお前に引導を渡せる訳かあ…良いだろう！乗った！」

斎藤 「山田さん！」

漫画神 「それでは今から私がゴッドアイで見た結末をお前にも見せてやろう。は…！」

照明が変わる。山田と久米島の『バンバンペー』が終わっている。

久米島 「きーっひっひ！ファーストゲームに続きセカンドゲームも僕の勝ちだああ!!」

山田 「くっくっく…負けちまったぜ…！」

古澤 「何の含み笑いだっただよ」

久米島 「それじゃあ約束通り…死んでもらう！ジャッジマン！」

ジャッジマンがおもむろに近づき山田の首を絞める。

山田「ぎえー！（そのまま倒れる）」

古澤「え、嘘でしょ？そんなやり方で？力づく？」

久米島「これで邪魔者はいなくなった！このジーニアスゲームは…僕のものだああ!!」

斉藤「その後、第二ゲームで久米島は惨敗した。その久米島を破った人も第五ゲームで

惨敗。結局この世には…常に上には上がいる、ってね」

斉藤、はける。

山田・久米島「天童院司先生の次回作にご期待ください！」

古澤「終わりがいい！クソみたいな終わり方ですね！これは作者大分自暴自棄だなあ」

漫画神「心が荒れた作者は主人公の山田を理不尽に負けさせ、後味の悪いラストを描こうとする。そうならないよう、我々で妨害していくぞ」

照明戻る。

ジャッジ「ファーストゲームは久米島様の勝利です」

ジャッジマン、はける。

漫画神「む、まずい早速か。お前はセカンドゲーム以降、ジャッジマンの片方として山田が勝てるようフォローしてくれ」

古澤「はい」

下手からOL、上手からハト次郎が出てくる。下手は『OLのグルメ』、真ん中は『ジーニアスゲーム』、上手は『くるっくハト次郎』になる。定期的に出てくる『メンコファイトゴ』。幕の真ん中だけ開き、そこにトランシーバーを持った漫画神が立つ。

漫画神「さて、私はここで4つの漫画全体を監視する。各漫画、お前の出番やフォローが必要な時がきたら知らせるぞ」

古澤「分かりました」

下手からハヤト、上手から暗黒太郎が現れる。ハヤトのメンコにあほ程メンコが乗っている。

帽子をとるとスーパーサイヤ人みたいになったハト帽子が出てくる」

殺し屋 「そ、その姿は…全ての羽が金色に逆立っている…！お前は一体、何なんだい…！？」

④ハト次郎 「とっくにご存じでござろう？拙者は穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めた伝説のハト…スーパーハト次郎でござるううう！！」

漫画神 「世界観どうなってるんだ」

山田 「セカンドゲーム開始だ、久米島」

漫画神 「…むむ？『ジーニアスゲーム』に動きが」

山田と久米島、『バンバンペー』を始めるが、1回目で久米島にアタックを繰り返す山田。

山田 「久米島、俺の勝ちだ」

久米島 「はあ？馬鹿だこいつー！1回目からアタックってえ！チャージもしてないのにい！これは誰でも分かる明らかな不正だー！」

山田 「くっくっく…」

久米島 「何が可笑しい！？」

山田 「俺は不正などしていない。先ほどのファーストゲーム、確かに俺は負けた。しかし、そのファーストゲーム中、俺はチャージを5回させてもらった。今のセカンドゲーム、その5回から1回分のアタックをしたまでだ」

久米島 「そんなチャージ繰り返しルール…あ！」

山田 「気付いたようだなあ、久米島。チャージ回数がゲームごとにリセットさせるということを、ジャッジマンは1度も明言していない」

久米島 「あ…あ…あああ！」

山田 「つまり、チャージ回数は継続される。このセカンドゲーム、俺の勝ちだ！」

ジャッジマン、出てくる。

ジャッジ 「いえ、普通に山田様の不正で負けです」

久米島 「やったあ！」

漫画神 「そこはOKとするところだろうが！空気を読み！古澤！急げ！『ジーニアスゲーム』だ！」

古澤、上手からはけ仮面を付けて真ん中から出てくる。

古澤 「私は不正ではないと。ルールの裏をかいいた見事な天才、ジーニアスぶりであった

と」

ジャツジ 「意見が分かれました」

古澤 「その場合、今のセカンドゲームは無効となります」

ジャツジ 「しかし今後、チャージ継続は認めません。両者のチャージ回数はゼロとなります」

山田 「ふん…まあ良いだろう。命拾いしたな」

漫画神 「それはお前だ。次は…『OLのぐるめ』だな」

古澤 「それでは私は再び別室で監視しております」

古澤、真ん中からはけ下手から出てくる。

古澤 「一度話してみたいんだよな、あのOLさんと。何かきっかけ…そうだ！まだOLさんが食べてなさそうな屋台の物を俺が購入して、」

OL、下手から出てくると右手にリンゴ飴、左手にイカ焼きを持ち、頭右側に綿飴、頭左側にフランクフルトが刺さり、首から平台をぶら下げその上に焼きそばが置いてある。

古澤 「めっちゃ買ってる！まるで隙が無い！というか計画的に購入する話どこいった！」

OL 「それじゃあ頂きまーす」

OL、右手のリンゴ飴と左手のイカ焼きを交互に食べる。

古澤 「いや、違う…？これは…計画的に購入している！体の右側に甘い物、左側にしょっぱい物を配置しているんだ！そして食べ終えた2つの串を箸代わりにして焼きそばを食べる気なんだ！」

OL 「(食べながら)リンゴ飴…イカ焼き…甘い物、しょっぱい物、甘い！しょっぱい！」
古澤 「ごくり…この食べ方は相乗効果で無限ループを呼ぶ！まさに甘い物しょっぱい物が永遠にぐるぐる回る、」

→台詞途中からハヤトと暗黒太郎が出てくる。ハヤト、劣勢の雰囲気。

漫画神 『メンコファイトゴー！』

古澤 「(メンコを握りながら) 地獄のメリーゴーランドやあああ!!」

ハヤト 「は？え？何？地獄のメリーゴーランド？」

暗黒太郎 「地獄のメリーゴーランド？」

神様「地獄のメリーゴーランド？」

古澤「地獄のメリーゴーランドとは…攻め・守りのメンコを交互に使い続けるメンコス
タイルのことだ。バランス良く戦え、ハヤト！」

間

ハヤト・暗黒太郎「うおおおおお!!!」

ハヤトと暗黒太郎、はける。

古澤「なんとかなった…!」

漫画神「いやかなりグレーゾンだったぞ」

OL「さて、大体食べたいものも食べたし、そろそろ帰ろうかしらねー」

漫画神「まずい、何かアクションを起こすのだ古澤」

①殺し屋「(フラフラしている) つ、強い…!これがお前の主人を想う心なのかい…!」

漫画神「む? (上手側を見る)」

②ハト次郎「その通りだ。ご主人から授かったあの言葉がある限り、拙者は強くなれる。そ
う、今もご主人の言ったあの言葉が頭の中で再生されるでござる…!ご主人のお言
葉!」

黒子、くいつくいつと漫画神へ合図を送る。

漫画神「うん、なんかあつちも出番みたいだな。黒子に求められている」

古澤「ええー同時に!？」

漫画神「慌てるな…秘技、ゴッドレター! (大量に写真の貼ってある手紙を裏から受け取
る)」

古澤「そ、それは!屋台名物ベビーカーステラの写真が大量に貼ってあるファンレター!」

漫画神「作者の作業机に、送信(紙を下手裏へ投げる)」

OL「締めめのベビーカーステラを忘れていたわー! (下手からはける)」

古澤「まんまと描いてくれたぜ作者さんー!」

ハト次郎「…ご主人のお言葉!」

古澤、急いで上手側へ行く。

③古澤「ハト次郎…○○××△△〜!」

④ハト次郎「…よくよく考えたら拙者、人間の言葉は分からないでござった」

古澤・殺し屋「なんだそれ！」

漫画神「ちゃんちゃん」

OL「(下手から戻ってくる)さて、締めも食べたし…今度こそ帰ろうかしら。今日もご馳走様でした」

漫画神「むむ！『OLのぐるめ』がもう終わってしまおう！」

OL「こうして明日も私のぐるめは、続いていくわ…1人でね」

漫画神「急ぐのだ古澤！」

古澤、急いで下手側へ行く。

古澤「あの、すみません！」

OL「え？なんですか？」

古澤「いえ…あの自分、古澤と言いまして(仮面を外す)」

OL「あれ？あなたもしかして、お昼とか色んなお店で時々お会いしている方？」

古澤「は、はいそうです！覚えてくれていたんですね。なんか嬉しいなあ。良く見かけるので今日はちよっと話しかけてみようかなーなんて」

OL「そうだったんですね。私、比良綾と言います。でもなんか恥ずかしいな。いつもバクバク食べてる姿ばかり見せて。はしたないでしょう？」

古澤「そんなことないです！」

OL「…え？」

古澤「比良綾さん。あの、今日初めて喋る相手からいきなりこんなこと言われて、困ると思うんですけど…」

漫画神「え？おいまさか？」

古澤「うん。今、今日ここで思い切って、あなたに伝えたいことがあります」

OL・漫画神「古澤さん…？」

漫画神「嘘だろあいつ？暴走してないか？別にフラグだけで、」

古澤「あの、自分…あなたのファンです！」

OL・漫画神「ファン？」

古澤「あなたの食べっぷりがホント気持ちよくて！ついついいつも、見ちゃうんです！なので、もしよろしかったら…今度一緒にご飯を食べに行きませんか！？」

OL「うん、まあ…別に良いですけど」

古澤「ホントですか！？やったあ！」

OL「もう何ですかそれ」

古澤「これから、よろしくお願いします！」

OL「こうして明日も私のぐるめは続いていくわ…でもこれからはちよつぱり、賑やかになりそうだけど」

古澤とOL、ポーズをとる。OL、はける。

漫画神「告白と思わせておいてのこのオチ。なるほど。ちょっとドキドキしちゃった。しかしこれで『OLのぐるめ』は無事、ハッピーエンドになったな」

黒子「くるっくハト次郎！」

漫画神「よし、次は『ハト次郎』がクライマックスだ。行ってこい」

古澤、頷き下手からはける。

- ① 殺し屋「強いね…(倒れる)。でもあたいを倒したところで、第2、第3の刺客が現れるはずさ…あんた家のベランダに、見知らぬフンが落ちていた時が運の尽きだよ」
 - ② ハト次郎「嫌な目印でござる…」
 - ③ 殺し屋「今の…フンと運をかけたのさ…がくっ(上手裏へ倒れる)」
- ハト次郎「最後の言葉がそれで良いのか…?」

古澤、上手から出てくる。

④ 古澤「ハト次郎! やつと見つけた! 心配したんだぞ!」

ハト次郎「ご主人!」

黒子「くるっくハト次郎」

① ハト次郎「ご主人…! 大事な話があるでござる…! 拙者は今、危険な奴らに狙われているでござる。ここにいたら、ご主人まで危険な目に合わせてしまうかもしれない…! フンとかかけられるかも…! だから拙者は…拙者は…国に帰るでござる!」

② 古澤「何…言ってるか、分からねえよ。さ、早く帰ろう? ハト次郎」

うつむくハト次郎。

③ 古澤「…思えば俺達は、この公園で出会ったんだよな。あれから色々あったなあ」

久米島「おい! 待て! ジャッジマン! 今のは不正だ!」

古澤「…俺さ、もうお前がいらない日常なんて考えられねえんだよな」

久米島「こいつ今、手をきちんと叩いていなかったあ!」

ジャッジマン、真ん中から出てくる。

ジャッジ「山田様、不正行為です」

山田「何？」

古澤「ハト次郎、俺はお前と過ごす時間が、」

漫画神『『ジーニアスゲーム』！』

久米島「きっひっひ！お前の負けということ、」

古澤、仮面を付け急いで真ん中へ行く。

古澤「私は不正ではないと思います」

ジャツジ「意見が分かれました」

古澤「その場合、無効となります。ゲームを続行してください」

山田「再開するぞ久米島」

久米島「…ちい！」

古澤、仮面を外し上手側へ移動する。

古澤「ハト次郎、俺はお前と過ごす時間が、」

久米島「不正だー！今度こそ不正だー！今、後出しをしたぞー！」

ジャツジ「不正行為です」

古澤、仮面を付け急いで真ん中へ行く。

古澤「私は不正ではないと思います」

ジャツジ「意見が分かれました」

古澤「その場合無効となります。ゲームを続行してください」

山田「再開するぞ」

古澤、仮面を外し上手側へ移動する。

久米島「不正だー！絶対不正だー！なんか…息が臭かったぞー！」

ジャツジ「不正行為、」

古澤、仮面を付け急いで真ん中へ行く。

古澤「ではないです！無効！久米島様、そんな滅多に不正にはなりません！いや、とい

うかゲームを中断し続けたので！あなたを不正で失格とします！セカンドゲー

ムは！山田様の勝利です！」

久米島 「なんでだー!?ちくしよー!」

山田 「くつくつく…狙い通りだ」

漫画神 「嘘は駄目だろあいつ…」

古澤、仮面を外し上手側へ移動する。

古澤 「ハト次郎…俺はお前と過ごす時間が、」

下手からハヤト、上手から暗黒太郎が出てくる。

漫画神 『メンコフアイトゴ』!」

古澤、慌ててメンコを取り出し待機する。

ハヤト 「うおおお!!」 暗黒太郎 「はああああ!!」

そのまま2人、すれ違いハヤトは上手へ、暗黒太郎は下手へはける。

古澤 「俺の出番ないんかい!今のシーン呼ぶ必要なかったですよね!？」

漫画神 「めんごめんご。メンコだけに」

古澤 「うるさいよ」

④ハト次郎 「拙者のご主人は…忙しい」

黒子 「くるつくハト次郎」

①古澤 「ハト次郎…俺はお前と過ごす時間が、なんか、なんか大切なものになってるんだよ。だからハト次郎、一緒に帰ろう?」

②ハト次郎 「(首をゆっくり横に振る) 言っていることは分かりませぬが…ご主人、そんなに悲しい顔をしないでください。拙者は必ず!必ずまた、戻って参りますゆえ!」

③古澤 「ハト次郎…!」

ハト次郎 「くるつくー!」

ハト次郎、上手へはける。

④古澤 「その夜、ハト次郎は帰ってこなかった。俺はその時直感した。もうハト次郎と会うことはないだろうと」

漫画神 「おい、古澤何を言っている?」

古澤 「そう、もうハト次郎とは会えない。絶対に会えない。会えないだろうなあ絶対」

漫画神「うん？」

古澤「まさかね、まさか明日になって帰ってきたりとかしないだろうし。そんな都合の良いこと起こる訳ないよね。漫画じゃあるまいし。うん、ハト次郎とはもう会えないのだ。さようなら、ハト次郎。まさか明日会えたりしないよね(黒子を促す)」

黒子「くるっくハト次郎」

①古澤「翌日」

漫画神「あれ？まさか、まさかこれって…」

古澤、上手をじっと見つめる。上手からハト次郎が出てくる。

ハト次郎「ただいま帰ったでござる」「くるっく、くっくー」

②古澤「はとじろう！どうして！？(棒読み)」

漫画神「逆に帰ってくるやつだこれー！フラグ立てまくってー！」

ハト次郎「半日で兄上倒してきた」「くるっくくるっくくるっくくるっく」

③古澤「はは、相変わらず何言ってるか分かんねえけど…」

④古澤「おかえり、ハト次郎」

ハト次郎「くるっくー」

黒子「くるっくハト次郎！これにて、完！」

古澤「最終巻は来月発売だ！」

ハト次郎「描きおろしおまけ漫画もあるで、」

古澤「ござるー！」

ハト次郎、古澤に顔を向ける。ハト次郎(古澤をポカポカ殴りながら)、黒子、はける。古澤、漫画神の横に移動する。

漫画神「うむ。2人の絆を再確認し、俺達の日常はこれからも続いていくことを示唆するラスト。素晴らしいじゃないか」

山田「さあ、ファイナルセットだ久米島」

漫画神「さて、次は問題の…」

久米島「むむむむ…！」

斉藤、野長、ジャツジマン、舞台に出てくる。山田と久米島、ゲームを始める。

古澤「神様、先ほど久米島には注意しましたが、再び不正不正と叫ぶ可能性はあります。いや、何か別の方法で山田を陥れようとするかもしれませんが。いずれにせよ、このままでは作者とのイタチごっこになります」

漫画神「そうだな、塚があかない。ここらで1つ、流れを変えるところか」

古澤「え？」

漫画神「秘技、ゴッドレターを使う。直接今から内容を書き、作者の机にファンレターを届けてやろう。荒んだ作者の心に響く、特別なファンレターをな」

古澤「いったい、どんな内容を…!？」

漫画神「天童院司先生へ。(女声で)私、青葉早紀って言います。17歳の高校生です。先生のジーニアスゲームが大好きです。先生のこと、好きです。きゃ☆言っちゃった☆早紀ね、ラストはハッピーエンドで終わってほしいなって。ハッピーに終わったら、ぜひ先生と2人つきりでお話したいです。…送信!(洪い声で)」

古澤「いやいやいや!怪しさが過ぎますよその文章!」

漫画神「駄目かな？」

古澤「今の時代あんな文章本気になる人いないですよ!」

山田のアタックが久米島のチャージに炸裂している。

ジャッジ「…まごうことなく、山田様の勝利です」

古澤「山田あっさり勝ったぞ!嘘でしょ!?あんなハニートラップで釣られたよ作者!最初からこうすればよかったのでは?」

漫画神「さあ残り数ページだ。後は古澤、お前にこの漫画のラスト、任せたぞ」

古澤「はい」

古澤、一旦はける。

山田「久米島、お前の負けだ。さつさとそのメダルをよこせ」

久米島「ふ、ふざけんな…僕が負ける訳ない…不正だ…全部不正だ、」

山田「久米島ああ!!お前の負けなんだよおお!!そもそも、お前が俺に勝てる未来なんざあ、1つもねえんだよおお!!」

漫画神「元々首絞められる予定だったんだぞお前。よくあんな台詞言わせられるな作者」

久米島「う…うわああああ!!終わったあああ!終わっちゃったああああ!!」

久米島とジャッジマン、はける。

斉藤「山田さん!信じてましたー!」

斉藤、はける。

野長「……」

野長、はける。

漫画神「あいっただけ結局何も喋らなかったが。なんだったんだあいっ……」

山田「ふん、今回も退屈だったぜ。まあこれで、3回戦か」

古澤、仮面を付け上手から出てくる。

古澤「いえ、その必要はございません」

山田「何？」

古澤「元々このゲームは、更なる天才が集まる『ウルトラジニアスゲーム』へのメンバー集めのために開催されたものでございます」

山田『ウルトラジニアスゲーム？』

古澤「そして山田様、あなたを我々のチームメンバーとして8兆円で雇いたい。12回もゲームをせずとも、あなたの天才さ、ジニアスぶりは良く理解できました」

山田「…良いだろう。その船、乗ってやる」

古澤「契約、成立ですね」

山田「くっくくく…！少しはこの退屈な人生も、楽しくなってきたな」

山田、はける。

古澤「この1年後、裏世界には1つの名が轟くことになる。『ジニアス山田』と」

漫画神「うーむ、まあこんなものか。あの最初の結末に比べたら大分良いラストになった
と言えよう」

ハヤトが下手から、暗黒太郎が上手から出てくる。

ハヤト「伝わる…皆のメンコソウルが！」

漫画神「そしてラストは『メンコファイトゴ』だ！」

ハヤト「ビシビシと伝わってくるぜええ!!！」

暗黒太郎「な、なんてメンコパワーだ…！何をやる気だ!？」

ハヤト「超奥義…ファイナルスターダストイリュージョン!!！」

メンコを持ったサヤカ、テツロウ、ジンが出てくる。

暗黒太郎 「な、なんだこいつらは！」

古澤 「(メンコを握る) この奥義は実体を持った仲間の幻を創り出す。しかしハヤトのやつ、3人も呼び出すとは。この俺だって1人が限界なのに、な」

ハヤト 「これが！仲間の力だああ!!!!」

ハヤト達4人がメンコを地面にペシッと投げると爆発音。サイレントで断末魔をあげる暗黒太郎。仲間達、はける。

漫画神 「これで『メンコファイトゴ』もハッピールートに入ったであろう」

古澤 「なんとか4つの漫画…やりきりましたね」

漫画神 「ああ。本当によくやってくれたよ。後は各漫画のエンディングを、見守るだけだ」

古澤と漫画神、上手後方へ移動する。↓3幕へ

【3幕】

下手側にハヤト、上手側に暗黒太郎が立っている。上手後方には古澤と漫画神がいる。

ハヤト 「はあはあはあ…どうだ！暗黒太郎！」

暗黒太郎 「なるほど…これが仲間の力というものか…悪くないかも、しれんな」

ハヤト 「暗黒太郎…！分かってくれたか！」

暗黒太郎 「ああ…ならば早速利用させてもらおう！」

ハヤト 「何！？」

暗黒太郎 「私の悪の組織のゴミどもよ！貴様たちの持つメンコを通し、私に死ぬまでメンコパワーを供給しろ！はーっはっはっはっは！」

ハヤト 「やめろ！そんなのは仲間の力じゃない！」

暗黒太郎 「しかし先ほどとは比べものにならないメンコパワーがみなぎってきたぞ！くらえ！プレスクラッシュャー！（メンコを地面に叩きつける）」

ハヤト 「ぐわー！（倒れる）」

暗黒太郎 「あまりのメンコパワーにより、死んでしまったか」

サヤカ、テツロウ、ジンが出てくる。

サヤカ 「そんな…ハヤト君、負けてしまったの？」

暗黒太郎 「そうだ。しかし安心しろ。すぐにお前らもあいつと同じ場所へ送ってやる！プレスクラッシュャー！（メンコを地面に叩きつける）」

サヤカ 「きゃー！」 テツロウ 「うわー！」 ジン 「あでゅー！」

3人、吹っ飛び倒れる。

暗黒太郎 「全員…死んだか。いや、あと1人目障りな大人がいたな」

古澤、抵抗するが吸い込まれるように暗黒太郎の横へと移動してしまう。見つめ合う2人。

暗黒太郎 「プレスクラッシュャー！（メンコを地面に叩きつける）」

古澤 「何これどういうことー！？（倒れる）」

徐々に暗転していく。

明転。

ハヤト、暗黒太郎、古澤の立ち位置が最初に戻っている。

ハヤト「…どうだ！暗黒太郎！」

古澤「え？なんだ？」

暗黒太郎「なるほど…これが仲間の力というものか…悪くないかも、しれんな」

古澤「何これ？さっきの最初に戻ったの？」

ハヤト「暗黒太郎…！分かってくれたか！」

暗黒太郎「ああ…これからはともに歩んでゆこう！」

古澤「あれ？違う展開？」

真ん中からサヤカ、テツロウ、ジンが出てくる。

ハヤト「皆！暗黒太郎に勝ったぜ！そしてこいつも今日からは、新しい仲間だ！」

暗黒太郎「私は仲間の素晴らしさに気付いた。これからはよろしく頼む」

サヤカ、テツロウ、ジン、3人で鎖き合い笑顔で暗黒太郎に近づきナイフで刺す。

暗黒太郎「ぐわああ…！」

ハヤト「何をやってるんだ皆！」

テツロウ「それはこっちの台詞だい。そんな都合の良い手の平返しが許される訳ないよ」

サヤカ「うん。今までどれだけ被害を受けたと思ってるの？これくらいの罰は与えないとね」

ジン「大丈夫だハヤト。死体処理は俺様の屋敷の者にやらせておく。証拠は何も残らない」

3人、暗黒太郎をナイフで刺し続ける。

暗黒太郎「いやリアル黒ひげ危機一髪かい…」

ハヤト「うーん…こりゃあ連れてこなけりゃあよかったなあ」

古澤「ちゃんちゃん、みたいになってるけど、全然オチでないよー？」

徐々に暗転していく。

明転。

ハヤト、暗黒太郎、古澤の立ち位置が最初に戻っている。

古澤 「あれ、なんだ！？また！？」

ハヤト 「暗黒太郎…！分かってくれたか！」

暗黒太郎 「ああ…これからはともに歩んでゆこう！」

真ん中からサヤカ、テツロウ、ジンが出てくる。

ハヤト 「皆！いつも今日からは、新しい仲間だ！」

サヤカ・テツロウ・ジン 「…よろしく！」

暗黒太郎 「よろしく頼む」

ハヤト 「あ！危ない！向こうからトラックが！」

『キキー！』というトラックのブレーキ音。吹っ飛ばされる5人。

古澤 「なんでトラックが！？唐突過ぎるだろ！」

徐々に暗転していく。

明転。

ハヤト、暗黒太郎、古澤の立ち位置が最初に戻っている。

古澤 「またかよ！一体…何が起こっているんですか！？」

漫画神 「これはまさか…作者が最終回の描き初めを、迷っているということなのか？」

古澤 「え？」

漫画神 「作者が何度も考えてはやめを繰り返しているということだ。しかしクソのようなバッドエンドの繰り返し…嫌な予感がする。秘技、ゴッドアイ！」

環と鈴木が椅子を持って出てくる。2人は1幕のラストをマイムで表現している。下手側が環、真ん中が『メンコ』、上手側が神様。

漫画神 「この作品の作者は、ペンネームわか。本名は…國分環か…國分環！？」

古澤 「どうしたんですか？」

漫画神 「こ、國分環といえばバッドエンド界のカリスマ！くそ！なんでもっと早くに気付けなかったのだ！」

古澤 「え、そんなにヤバイ漫画家なんですか？」

漫画神 「お前にもゴッドアイを共有してやろう（下手に手を向ける）」

環 「今度はそんなラストばっか描き続けたよ。ひたすらね。そしたらいつの間にか、結末がバッドエンドしか描けない体になってさー。というか今や、自分の描い

た結末がハッピーなのかバッドなのかも分からなくなってしまっている！」

古澤 「あれは、重症ですね…」 鈴木 「それは、重症ですね…」

古澤 「思ったよりヤバイ人だった…」

漫画神 「私は彼女の短編漫画を読んで8回吐いたことがある」

環 「だから今も『皆のお絵描きサイト』で漫画投稿してんだから。もう一度ハッピー

エンドが描けるようになるために、リハビリしてんの」

古澤 「あれ？でも環先生、それを克服しようとしていますよ」

鈴木 「だったら頑張りましょう、2人で。私もとことんお付き合いしますよ。絶対この

漫画、ハッピーエンドにしましょう！」

環 「うん」

古澤 「なんだ、ハッピーエンドにしようという心意気はあるみたいですね。よかった」

漫画神 「今の会話がちょうど1週間前」

古澤 「え？」

漫画神 「そしてここからが、現在だ」

鈴木 「環先生！私とハッピーな最終回を考え始めて今日で1週間ですね！」

環 「そうだね！」

鈴木 「いやー！あの手この手で色々な展開を考えますが、環先生のお力でゼーンぶぶ

ツドなエンドに変えられちゃいますね！すごい！環マジック！」

環 「いやいやなんのなんの！」

鈴木 「いやーもう、笑うしかない！ってね！」

環・鈴木 「はっはっはっは！」

古澤 「地獄みたいになってる！」

漫画神 「これが國分環の力だ…！」

鈴木 「笑ってる場合じゃないですよ!!」

古澤 「あっち（鈴木）のの方が情緒ヤバそうですね」

鈴木 「流石にもう時間がありません！いくら速筆の環先生でも、これ以上一から描き直

していたら締め切りに間に合いません！」

環 「…そうだね。流石に最終回の原稿を落とすのはマズイよね…」

鈴木 「勿論です！最終回記念の企画等も色々動いていますから、原稿を落とすことは絶

対にできません！」

環 「うん…」

鈴木 「ですから…大変不安ではありますが、今から描き直し無しで描いていきましょう

…！」

古澤・漫画神 「え？」

鈴木 「先生がデジタルでよかった。これから1ページ描く度に、先生のタブレットから

印刷会社へ自動的に送信するよう設定します。すぐにダッシュの印刷を行うた

めです。つまり、一度描いたらもう後戻りはできません。…良いですね？」

環 「…分かったよ」

古澤 「分かつちやいましたよ環先生！」

鈴木 「ですから、ハッピーエンドのために、本当に慎重に描いてくださいよ！」

古澤 「どうするんですか？このままだと…!？」

環、タブレットにペンを置く。ハヤトと暗黒太郎が動き出し、握手をする。

漫画神 「慌てるな。後戻りができない状況。あの担当編集が言った通り、環は慎重にならざるを得ない。まずは冒頭の動きを、しっかりと観察する」

暗黒太郎 「これからはともに歩んでゆこう！」

サヤカ、テツロウ、ジンが出てくる。

サヤカ 「ハヤト君！勝ったのね！（ハヤトに抱き付く）」

ハヤト 「やめろよサヤカちゃん」

テツロウ 「ハヤトさん、照れてるんだな」

暗黒太郎 「今ですすまなかった。償っても償いきれんと思うが」

サヤカ 「ホントよ。だからその償いとして…あなたのメンコを勝手に見せてもらうんだから」

暗黒太郎 「え？」

ハヤト 「まったくサヤカちゃんは。本当にメンコが好きなんだから」

サヤカ 「ふふふ…！一度、あなたの持つ伝説のメンコを見たかったの!!」

暗黒太郎 「ああ、そんなことで良いなら。そこに置いてあるメンコだ」

サヤカ 「ありがとう!!（メンコフィールドからメンコを9つ取る）これはいらない！（メ
ンコフィールドを後ろに捨てる）…綺麗。ふふ、ふふふ…！ふふふふふ！手に入
れた…！ようやく9つのレジェンド全てを！（9つのメンコを掲げる）」

暗黒太郎 「何？」

サヤカ 「私は、この時を待っていたのよー！」

ハヤト・テツロウ 「サヤカちゃん!？」

環・サヤカ 「そう…全ては私がレジェンドの力を手にするために！」

古澤 「冒頭から早速ヤバイことになってるんですけど!」

環 「(ピロリン♪送信サレマシタ) あ、送信されちゃった」

古澤 「本当に送信されちゃいましたよ！今の冒頭が本誌に載るんですか!？」

鈴木 「ああああ…！嘘だあ…!」

漫画神 「まさかここまでとは…仕方ない。こうなればもう、最後の手段だ。秘技その3、

ゴッドソウルを使うしかない」

古澤 「神様の最後の秘技……！」

漫画神 「これは私の魂を半分人間へ飛ばし、少しの間乗り移ることができる技だ」

古澤 「すごい！作者の体に？」

漫画神 「いや、作者は無理だ。いくら私とはいえそこまで物語へ干渉することはできん。

しかし、最も近い人間……あの担当編集者に入ることならば可能だ」

古澤 「それでもすごい……！これでこっちからアドバイスを直接送れるという訳です

ね！」

漫画神 「秘技、ゴッドソウル!!」

鈴木 「ここからハッピーエンドにしないと……！ハッピーエンドにしないと……！読者から……！編集長から……！怒られるううううう……（段々うずくまる）」

環、じつと鈴木を見ている。鈴木、突然起き上がり、漫画神と同じ動きをする。

鈴木・漫画神 「……さて環殿、次の展開だが」

環 「いやいや！そんな何事もなかったように！さっきちょっとヒクくらい嘆いてたのに」

鈴木・漫画神 「はっはっは。もう大丈夫だ。私の言う通りにすれば必ず最高のエンディングへ導いてくれよう」

環 「しかもなんかキャラ変わってない？ホントに大丈夫？」

漫画神 「よし、成功したようだ。あとは私の持つ膨大なアイデアを披露するのみよ」

鈴木 「さてさて、環殿よ。それでは次のページはこのような展開で如何かな？」

鈴木と漫画神、手をハヤト達に向ける。

サヤカ 「ふふ、ふふふ……！」

ハヤト 「サヤカちゃん……！そのメンコパワーで一体何をやる気なんだ!？」

サヤカ 「知れたこと……！この強大な力を使い、ペットのポチの病気を治すのよ……！」

ハヤト 「メンコパワーでやること……！」

環 「なるほどなるほど……！」

鈴木 「これでこの件はただのコミカル展開となり、またヒロインの良い娘キャラも守られた」

環 「これで戻ってこられるよ、ありがとう！」

鈴木・漫画神 「なんのなんの」

環 「えっとそれじゃあその続きだと」

ジン 「そんな願い、レジェンドに頼る必要はない」

サヤカ「え？」

ジン「俺様の金で優秀な獣医を雇い、お前のペットの病気を完治させてやると言ってるんだ」

ハヤト「へっ！ジンのやつ」

テツロウ「流石お坊ちやまなんだな」

サヤカ「ジン君、ありがとう…！」

ジン「礼などいらぬ。こうやって（サヤカからメンコを奪う）、レジェンドを手に入れる機会を」

環・ジン「与えてくれたのだからな！やはりレジェンドは俺様が持つに相応しい！」

サヤカ「ジン君…！」

ハヤト「ジンをめえ…！」

古澤「環てめえ！何やってんだよ！またバッドな流れに戻しやがって！」

環「（ピロリン♪送信サレマシタ）あ、また送信された」

古澤「描いてたの！？今のやつ全部清書しちやってたんだ？流石の速筆だね！馬鹿野郎！」

環「ごめんね、鈴木君…」

鈴木「…なるほど。ならばこれならどうだ！」

ハヤト「馬鹿野郎！（ジンを殴る）」

サヤカ「ハヤト君！？」

ジン、持っていたメンコを地面に落とす。

ハヤト「そんなコソ泥みたいにレジェンドを手に入れて何の価値がある！そんなに欲しかったら、俺と戦って手に入れてみる！ジン！」

ジン「ハヤト…」

テツロウ「まったく、飽きれてしまうんだな（地面のメンコを拾い集める）」

環「そしてこうなる訳ね」

環・テツロウ「ハヤトさんの戯言には！こうやって最後にレジェンドを手に行っている者が勝者よ！」

古澤「1コマで台無しか！というかもう良いよこの流れ！どんだけ黒幕いるんだよ！ナルトか！」

環「（ピロリン♪送信サレマシタ）」

古澤「だからなんで描いちゃうんだよ！」

鈴木「どうか環殿！こっちで提案した展開をそのまま描かないでくれ！描いたら描き直せないのだから！」

環「ごめん。だってもう時間ないって言うから…！思わずこの手が、描いちゃうの

よー！でもまだまだ序盤だから！こっから！こっから巻き返していきましょー！」

鈴木「確かにそうだが…こいつが元凶なのに…」

漫画神「こうなれば…！お前（古澤）が行ってこい」

古澤「もうネタ切れですか！？分かりましたよ…！俺が参加して流れを変えてやる！」
漫画神「頼むぞ」

古澤、舞台真ん中へ移動する。

古澤「駄目じゃないかキミ達！」

4人「メンコフアイター」

古澤「（ジンからメンコをとる）まったく…この伝説のメンコは、俺のもんだー！はーっはっはー！」

鈴木・漫画神「お前もやるんかい！」

漫画神「ここにきてふざけるなよお前！今の本誌に載るんだぞ！」

ハヤト「メンコフアイターまでふざけないでくれよ！このレジェンドは俺のだぞ！（メンコを古澤から奪う）」

古澤「いえ、違うんです…！」

漫画神「はあ？」

古澤「このメンコを手にして分かった…これはただのふざけた展開じゃなかったんだ…！」

ハヤト「…はははは！ようやく俺の手に9つのレジェンドが回ってきたぜー！！」

漫画神「何？」

ハヤト？「っと、そろそろ茶番はおしまいにするか」

暗黒太郎「ハヤト…？」

漫画神「まさか、この展開は…！」

ハヤト？「貴様達、今までメンコ集めご苦労であったな。そう…黒幕は我だ。このメンコである、我がな（メンコを前に掲げる）」

全員「メンコ…？」

漫画神「やはり。これは物に意志が宿っており、その物自体が黒幕という展開…！今回はそれがメンコだったという訳だ。メンコに触れたが最後、その黒幕に体は乗っ取られてしまうという訳だ…！」

ハヤトメンコ（以下ハヤコ）「ふむ。メンコを通じて様々な体を回ってみたが、この男の体
がやはり一番しっくりくる」

ジン「お前はいつたい…何者だ？」

ハヤコ「我は遙か昔レジェンドを9つ集めた人間、そうだな、メンコエンペラーとでも名

乗ろうか。我は集めたレジェンドの力により、自らの魂をメンコに封じ込めた。そして再び9つのレジェンドが集まった時、我が目覚め、集めた者の魂を支配できよう策したのだ」

ジン「そんなことをして、何が目的だ？」

ハヤコ「知れたこと。時代ごとにレジェンドを9つ集めた人間を操り、」

環・ハヤコ「永遠にこの地球を支配するためだ！」

鈴木「環殿：もしやこのメンコが黒幕設定を、最初からずっと考えていたのか？」

環「：いや、なんかこの場の勢いで描いちゃったやつだ：！！」

古澤「即興かい！この土壇場で！」

漫画神「やはりバッドエンドのカリスマだな：！！」

古澤「急にこんな展開：どうしましょうか？」

サヤカ「どうするって：決まってるじゃない」

古澤「え？」

サヤカ「ハヤト君を、助けるのよ！」

古澤「いや、えっと」

テツロウ「でもどうやってハヤトさんの体からメンコエンペラーを追い出すんだい？」

暗黒太郎「戦いながらハヤトからレジェンドを取り上げるしかあるまい」

ジン「そうだな。ハヤトを助けるぞ！お前ら！」

テツロウ「おう！ サヤカ「うん！」 暗黒太郎「ああ」

4人、各々のメンコを取り出し、ハヤコに構える

ハヤコ「我と戦うか。それも良いだろう」

暗黒太郎「早くメンコをセツトしろ」

ハヤコ「いや、そもそもメンコで戦う意味が分からないから、我はチャカを使うぞ。（環から銃を受け取る）」

古澤「元も子もないこと言い出したぞこいつ！メンコ漫画なのに！しかもチャカつて！」

漫画神「この流れ、非常にまずいな：このままでは、この世界は悪に支配されてしまうぞ！：いや待て、問題はそれだけではないぞ：ゴッドアイ！：：：やはりか」

漫画神と古澤にスポットライト。

古澤「どうしました？」

漫画神「他の漫画達が：！！」

OLが真ん中から出てくる。

OL「んー！お祭り楽しかったー。そしてあの古澤って人…気持ち悪かったー！急に何だったんだあいつ…気持ち悪。それにやっぱりご飯は1人で食べたいわよね。今後はあの人に会わないよう、少し遠出してご飯を食べよう」

OLがはけ、山田が真ん中から出てくる。

山田「くつくつく…！10日後からウルトラジャーニアスゲームか…！10日後…？しまった。10日後は歯医者予約がある…！ウルトラジャーニアスゲーム…辞退する」

山田がはけ、ハト次郎が真ん中から出てくる。

ハト次郎「やっぱり国に帰って独裁ハト国家を創るでござる。くるつくつくー」

ハト次郎がはける。

漫画神「3つの漫画全てがバッドエンドになろうとしているのだ」

古澤「ええー！？」

漫画神「今はまだ問題ないが、このまま時間が経てば各作者の手により結末がバッドエンドに変えられてしまうだろう…」

古澤「な、なぜそんなことが…まさか4つの世界が1つの同じ世界であることと関係が？」

漫画神「そうだ。この世界が支配されれば当然他3つの世界も支配されることになってしまふ。せつかくハッピーエンドで終わろうとしている中、悪に支配されるといふ最悪のバッドエンドも迫っている。そんな矛盾に耐え切れなくなった漫画達の結末が、作者の意志に関係なく…歪もうとしているのだよ」

古澤「そんな…！それではどうするのですか？現状さらに他3つの漫画をフォローするなんてこと、絶対にできませんよ！？」

漫画神「……」

古澤「神様！」

漫画神「仕方ない…『メンコファイトゴ』を、放棄する」

古澤「え？」

漫画神「この世界を神の受け持ちから、私の保護下から、放棄する。この同一世界から切り離す。そうすればこの『メンコファイトゴ』がどんなバッドエンドで終わる」

でも、他の漫画に影響を与えることもなくなる」

古澤「それはつまり…俺達は一切この漫画に干渉できなくなるってことですよね？」

漫画神「そうだ。早くお前も『メンコファイター』の世界から離れる。閉じ込められるぞ」

古澤「そんなことをしたら、この世界は確実にバッドエンドになりますよ！？」

漫画神「分かっている！そんなことは…！しかし全ての物語を台無しにする訳には、いかにのだ…！」

古澤「どうか…ならないのですか…？」

うつむく漫画神。照明が戻る。

環「ううう…どうしてこうなった…！でもまだ、何とかできるはず！ね？鈴木君！」

鈴木「いえ環殿。ここまで話がこじれてしまったら、もう修復は不可能だ」

環「え？」

鈴木「ならばこの展開から、バッドエンドでも良い、終着点が一番綺麗なラストを考えよう」

環「え、いや、でも」

鈴木「環殿。へたに足掻けば足掻くほど、余計悪い方向に進む可能性もある。いや、その可能性の方が高い。…分かりましたね？」

環「……」

鈴木「…力になれず、申し訳ない」

環「ふふ…私がハッピーエンドを描くのは、まだ無理だったかあ」

鈴木「…次の作品では、頑張ってくれ」

ハヤコ「（銃を構える）さあ貴様ら。大人しく諦めるのだ。我はこの体とレジェンドの力で、世界を支配しなければならぬのだからな」

古澤「…もう、無理なのか」

ハヤコ「そう、無理だ」

サヤカ「無理、なんかじゃない…」

古澤「え？」

サヤカ「無理、なんかじゃないって言ってるの！」

テツロウ「そ、そうだ！無理じゃないんだな！」

ジン「ふん、メンコファイターともあるう者がこんなことで諦めるとはな」

暗黒太郎「拳銃くらいでなんだ。何とかして、必ずハヤトを助けよう」

サヤカ・テツロウ「うん！」 ジン「ああ！」

古澤「皆…」

鈴木「環殿？」

環「あれ？おかしいな…。なんかはやびーの仲間達はまだ諦めないみたい」

鈴木「それはあなたのさじ加減でしようが…!」

ハヤコ、銃を2発撃つが外れる。

ハヤコ「やはり子供の体で銃を撃つのは難しいな。が、今ので調整できた。次は外さない」

ジン「うち！本当に次は当ててきそうだな…！仕方ない、ここは俺様が囷になる。俺様が突撃したら、その際にお前らはハヤトに近づけ」

テツロウ「手を挙げる）いや、その囷役は鈍くさい僕にやらせてほしいんだな」

サヤカ「手を挙げる）ううん、だったら一番力の無い私がやるわ」

暗黒太郎「手を挙げる）そういう役は大人の私がやるものだ」

4人、古澤を見る。

古澤「…じゃあ、俺がやるよ」

4人「(全員手を古澤に向ける)……じゃあ、皆でやろう!」

古澤「…ああ」

漫画神「おい」

古澤「いやいや違う違う。それ皆で突撃するだけじゃないか。それより良い作戦がある」

漫画神「古澤、早くその漫画から離れろ」

古澤「…ここでメンコファイターが1人諦めた方が不自然ですよ。信じた大人に逃げられる方がバッドエンドだと思いませんか？」

漫画神「この世界は放棄すると言ったはずだ。バッドエンドでも、仕方ないんだ」

古澤「仕方なくない。皆が、皆がまだ諦めていないなら、」

漫画神「こいつらの言っていることはただの創られた台詞だ！こいつらはただのキャラクターなんだ！こいつらに、意志などない！」

古澤「違う…あなたはこの世界の住人じゃないから分からないんだ」

漫画神「何？」

古澤「俺達は確かにこの世界で生きている。1人1人命を吹き込まれている。作者という神様から。俺達はこの世界が現実なんだ。外の世界との差なんて、ない。その世界に暮らす皆が不幸になることを知ったまま、どうして俺だけ逃げられる…！俺はハヤトの、皆の師匠だ…！1人の師匠メンコファイターとして、ハヤトを、この世界の皆を救ってやりたいんだ！」

漫画神「…どうせ最後はバッドエンドになるんだぞ？いくらお前が足掻こうが、最後の最後でバッドエンドに塗り替えてくるぞ、この作者は」

古澤「だったらそれもハッピーエンドに塗り替えてみせます」

漫画神「お前は、他の3つの漫画も台無しにする気か…？」

古澤「いえ。ですから早くこの世界、切り離してください。もう他の漫画で俺の出番はありませんから。俺はここに、残ります」

漫画神「…はああ」

古澤「皆！ハヤトからメンコを取り上げるために俺の作戦に乗ってくれ！」

4人「はい（ああ）（古澤の近くに集まる）」

古澤「作戦はこうだ、」

ハヤコがジンを撃つ。

ジン「ぐわあ!!（倒れる）」

古澤「おい！作戦の説明中に撃つなよ！不正だー！」

ハヤコ「知らん。隙だらけだったからな」

サヤカ「じ、ジン君…」

テツロウ「あ、あ、あ…!!」

ハヤコ「本物の死体を見て恐怖したか？テツロウ君」

テツロウ「う、うわー！（走って真ん中からはけようとする）」

古澤「テツロウ！」

ハヤコ、逃げるテツロウを撃ち、テツロウ、真ん中から倒れるようにはける。

古澤・サヤカ・暗黒太郎「テツロウ！」

ハヤコ「背を向けたのだ。撃ってくださいと言われたのかと。間違っていたか？」

→喋りながらハヤコが正面、3人が後ろを向く立ち位置になる。

古澤「…いや、その通りだ」

ハヤコ「ああ？」

テツロウ、真ん中から飛び出てハヤコを羽交い絞めにする。

ハヤコ「何！？確かに急所を撃ち抜いたはず…!!」

古澤「撃たれたテツロウはスターダストイリュージョンの幻だ。俺も1人だけなら、幻を作り出せるんでね」

テツロウ「皆！今のうちなんだな！」

3人、頷く。暗黒太郎とサヤカ、ナイフでハヤコを刺す。

ハヤコ「…見事なり(倒れる)」

古澤「…いやなんでナイフで刺しちゃったんだよ！」

暗黒太郎「え？いやなんか雰囲気的に攻撃した方が良かったって…」

サヤカ「あ、あ、ハヤト君をこの手で殺してしまった…！」

テツロウ・サヤカ・暗黒太郎「あああああ…！」

古澤「こういうタイプのバッドエンドにしてきたのね！？くそ…！…！皆は絶望していた。しかしこの時ハヤトの体は、レジエントの強大な力で支配されていてやのて身体能力や自然治癒力がすごい高められていた。そう今、メンコエンペラーは静かに傷を癒して不意打ちを狙っているところだったのだ…！危ない！皆…！」

間

ハヤコ起き上がる。

古澤「メンコエンペラー！(歓喜)」

ハヤコ、サヤカとテツロウを撃つ。

古澤「メンコエンペラー！(激怒) 敵としての行動が早い！くそ…！サヤカ、テツロウ…！」

暗黒太郎「懐に手を入れながら…メンコエンペラー。私と共に世界を征服しないか？」

古澤「暗黒太郎！？ここにきて裏切るのか！」

ハヤコ、暗黒太郎を撃つ。倒れる暗黒太郎の懐からナイフを握った手が出てくる。

ハヤコ「断る。近づいた我を再びナイフで刺す気だったのであろう」

古澤「暗黒太郎…！…残念だったなメンコエンペラー！今の発砲で6発だ！リボルバ

ー式のその銃に弾はもう残って、」

環・ハヤコ「拳銃が1つしかない、誰が言った？(箱から大量の拳銃を取り出す)」

古澤「何をやっても上塗りされる…バッドエンドに…！…でもまだだ！まだ、」

ハヤコ、古澤に銃を撃つ。古澤、倒れる。

環・ハヤコ「これで全員…死んだな」

漫画神「やはり…こうなるのだ。古澤だけでも回収してきて、」

環・古澤「死んでない!!」

漫画神・鈴木「!!」

鈴木「…環殿？」

古澤「まだまだ起き上がる、俺は。ほら、皆も起きられるだろ」

漫画神「今の復活は古澤だけの意志？いや、環の意志も…」

ハヤコ「そいつらは全員致命傷を受けた。つまりもう死んで、」

古澤「いない！実は戦う前、皆は自分の急所にメンコを忍ばせていたのさ。だから致命傷は避けられたんだよね」

ハヤコ「私の拳銃は普通のメンコ等軽々と貫通する」

環「(古澤はマイムのみ)そのメンコは…すごい分厚いメンコだったんだよ。貫通なんてできない」

古澤「だから皆は生きてる。ほら、皆の寝息がうるさいな。皆、早く起きろ、」

ハヤコ「そんな寝息等一切聞こえ、」

環・古澤「聞こえる！だって皆は…生きてるから」

鈴木「死亡確定フラグと生存フラグの立て合い…!」

ハヤコ「現実を見る。生きてなどいない」

漫画神「今、環の意志は2つの間で揺れ動いている。それは環自身の頭が、混乱しているから？それとも、克服しようとしているのか…？バッドエンドを…!」

環「このメンコファイター、なんで諦めないんだよ…なんでこんな台詞、描いちやうんだよ…なんでだよ…?」

鈴木「…別に、簡単なことじゃないか？」

環「え？」

鈴木「その描きあがった台詞が…それこそが、あなたの望んだ展開ではないのか」

環「私の望んだ展開…?」

古澤「まだまだ…ここからハッピーエンドに、してみせる…!」

漫画神「古澤、聞こえるか？」

古澤「…聞こえませんが」

漫画神「まあそう言うな。お前のおかげで、少しだけ希望が見えてきたようだ」

古澤「え？」

漫画神「とは言え以前状況は悪いまま。そこで1つ、大博打に出たいのだが…付き合ってくれるか？」

古澤「それ、大丈夫なんですか？でもまあ…お付き合いしますよ」

漫画神「あの編集者の体でしかできないことだ。少し時間がかかる。なんとか時間を、稼いでいてくれい！」

鈴木は下手から、漫画神は上手からはける。

古澤「時間を稼ぐ、って…」

環「ちよつと鈴木君！戻るまで描くのやめてって言われても…無理…私の手、勝手に描いちゃうってばー!!」

環も下手からはける。

ハヤコ「不毛なやり取りはもうやめよう。こやつらが生きていようがなかるうが、」

古澤「時間を稼ぐ、つまりページ数を稼ぐ…?」

ハヤコ「貴様を殺した後ゆっくりとトドメをさしてやれば何も問題は無い」

古澤「つまり、だれる展開を作る…!」

ハヤコ、拳銃を古澤に向ける。

古澤「…なぜだ?」

ハヤコ「は?」

古澤「いったいなぜ、このメンコエンペラーの性格はこんなにも歪んでしまったんだ…!」

ハヤコ「急に何を言っているのだ?」

古澤「一体全体こいつの過去に何があったんだ…!きつと何か、大きなことがあったんだ!」

ハヤコ「おい、」

古澤「気になる…このメンコの過去が!気になるこのメンコの過去が!気になるこのメンコの過去が!教えてくれ…お前の過去を!」

ハヤコ「…そこまで言うなら仕方がない!聞かせてやろう!冥途の土産にな!」

古澤「サブキャラクター秘技!冥途の土産による!重要人物の強制回想パート!」

ハヤコ「乗せられてしまった!」

回想のBGM。倒れている4人、はける。

ハヤコ「な、なんだ?外の空間、外枠が黒のベタ塗りになってゆく!」

古澤「そうこれはメンコエンペラーがまだ1つのメンコになる前の、遙か昔のお話」

下手から青年が出てくる。

青年「燃え上がるようなメンコファイトがしたいぜ…うん?(上手側を見る)」

小悪党と女が出てくる。女、小悪党にからまれている。

小悪党「ひゃーっはっはっはー！可愛いお嬢ちゃん！持ってるメンコを全てよこしな
〜！」

女「きゃー！誰か助けてー！」

青年「あんな野郎とは、できないだろうがな…！おいやめろ小悪党が！」

小悪党「何〜？」

青年「くらえ！プレスクラッシャー！（メンコを落とす）」

小悪党「ぐわあああ！俺のメンコがあああー！（倒れる）」

女「どうもありがとう！あなたのお名前は…？」

青年「…名乗る程の者じゃないさ」

ナレーターが出ててる。

女「あ、待ってくださいー！」

ナレーター「(起きた小悪党に手を向ける) 彼が後の、メンコエンペラーである」

古澤「あ、そっち！？小悪党の方がメンコエンペラーだったの！？」

ハヤコ「…随分懐かしいな」

古澤「お前も認めるんだ？あ、しまった…！自分で始めたことなのに思わずツッコんで
しまった…！」

ハヤコ「その後我はあのクソキザ野郎に惨たらしい復讐をしたいその一心で9つのレジ
エンドを集めきったがその強大な力をあんな耳クズ1人のために使うのも馬鹿
らしくなりもういつそ永遠に我のための世界を創ろうと考え自らの魂をメンコ
に、込めたのだ」

4人、はける。

古澤「くそう！要点だけを喋り一息で回想を終わらせやがった！そしてこいつ、最初か
ら最後までただただ悪い奴だったな！」

ハヤコ「私の貴重な過去も知れたことだ。もう良いだろう。そろそろ…死ね」

古澤「俺は死なないさ。例え拳銃で撃たれても！絶対に、死なないさ！」

ハヤコ「それが貴様の最後の言葉となるのだった」

古澤「…っ！」

山田「待ちな」

ハヤコ「誰だ？」

古澤「え？この声は…？」

山田が下手から出てくる。OL、ハト次郎も出てくる。

山田「くっくくく…！新しい雇い主さんに死なれちゃあ困るんでね」

OL「くっくくく…！また1人でご飯を食べるのはごめんなんでね」

ハト次郎「くっくくく…！」

ハヤコ「本当に誰だお前ら！」

古澤「お前ら…なんで！？とかホントになんで！？違う…漫画だぞ！？」

漫画神「説明しよう」

漫画神が上手から出てくる。環と鈴木も下手から出てくる。

漫画神「この乗り移った鈴木氏、メジャー誌の少年ダッシュ編集者としてコネと権力を少なからず持つ。それを最大限に使い、3つの漫画の作者に電話でかけ合っただの。『メンコファイトゴー』の最終話に、主人公達を登場させたいとな」

漫画神がOL、ハト次郎、山田にベレー帽を渡す。3人それをかぶりそれぞれの作者になる。

鈴木「ええ、実は『OLのぐるめ』に出てくる古澤太郎という男、うちのメンコファイターと名前もキャラも同じでしょね。世界観も同じみたいなので、いつそ最終話にコラボとして、OLさんをチラツと登場させたいなーなんて」

ゆるゆる子「へーなんか面白さそうね。私そういうの、けっこう好きよ」

鈴木「今こういう他社同士のコラボが流行っていますし、絶対面白いと思うんですよ。ハト次郎が出てきたら」

ホワット隆「ははは。うちのハト次郎でよかつたらくるつくーと登場させてやってください」

鈴木「どうでしょうか？ジーニアス山田、登場させても…大丈夫でしょうか？」

天童院司「駄目だ」

古澤「やっぱりこの作者だけめんどくせえな！」

鈴木「…これは余談なのですが、ダッシュは知っての通りメジャー誌です。つまり読者の層も幅広い。先生のキャラが出るとなればそこから女性のファンが付くというところも、」

天童院司「仕方ない良いだろう」

古澤「女性に関してブレないなこいつ！」

鈴木「ということだ環殿。物語の起死回生のため、3人の主人公達を登場させよう。さあ、急いでこの3人のキャラの特徴を覚えるんだ。テキストに描く訳にもいかな

いからな」

環「大丈夫知ってるよ、この3人の漫画全部。OLとハト次郎とジーニアス山田でしょ？この3つの漫画、うちのメンコファイターっぽい人が出てくるから、勝手に妄想してたんだよね」

鈴木「え？」

環「というか：はやびー含めたこの4人で一度短い漫画、描いたことあるからね。ほら、前見せた漫画『エイリアンは誰だ！？』あの4人、全員この4人だからさ。まあ私の妄想で多少キャラ変わってるかもだけど」

鈴木「そうか：そうか。環殿は、本当に好きなのだな」

環「まあね。漫画も妄想も大好きよ。さてさて各作者公認か：好き勝手に描くぞー！」

3人、ベレー帽を取り下手へカッコよく投げる。

漫画神「という訳だ」

古澤「確かにこの顔ぶれはすごいです：けどこの3人、戦力になるんですか！？」

漫画神「戦力？何を言っているのだ。仮にも各漫画の主人公達。その存在力、そして影響力で：必ず相手はペースを飲み込まれるはずだ！」

ハヤコ「ふん。そんな人間どもに何ができる？（拳銃を構える）」

山田「くっくくく：この戦いには、必勝法がある！」

ハヤコ「何？」

山田「くっくくく：俺の頭にはとっておきの策が入っている。まずは…OL行け」

古澤「まずは人任せなんだ」

OL「くっくくく：（鞆に手を入れる）」

古澤「皆そのキャラなの？ちゃんとキャラ分かってる？」

ハヤコ「何を出す気だ？」

OL「（肉まんを取り出す）551の肉まんよ」

古澤「あ、やっぱりあのOLだあ！」

OL「これは普通の肉まんじゃないわ。外はもちもちの生地。中にはたっぷりシヤキシヤキの筍が混ざったお肉。一口噛むと踊り出す肉汁達…！そう、普通じゃないのよ」

古澤「あ、特別に美味しい肉まんって意味ね」

ハヤコ「くくり。そういうえばメンコになってから美味いもんなんで全然食べてないな…！」

古澤「え？」

OL「あら？今のあなたなら、直接人の体に乗っ取っている訳だし、味も分かるわよね？どう？あなたも食べてみる？551の、肉まん」

ハヤコ「い、頂こう！（食べるように食べる）ばくばくばくばく！」

OL「そうそう言い忘れてたわ。それ、この中(鞆)に10日間しまっていたものなの」
ハヤコ「…うっ！」

OL「この真夏で傷んでなきゃ、良いけどね」

ハヤコ「おええええ!!」

古澤「2つの意味で汚い攻撃だ！」

ハト次郎「ハト流最終奥義…!」
「くるくくくくく…!」
「目覚めよ拙者の体に宿る小さな勇者達よ…!」
「くるくくくくく…!」
「新種のばい菌アターック！」

ハト次郎、ハヤコの口の中に手を突っ込む。

ハヤコ「おええええ!!」

古澤「お前らそんなばっかだな！」

山田「作戦通りだ」

古澤「ホントかお前?お前だけなんか信用できないんだよな…でも、流石は主人公達だ。
流れは完全にこっちのペースだ！」

ハヤコ「ふ、ふざけおって…! (拳銃を構えるがフラフラしている)」

山田「くつくつく…フラフラだなあ。そして1つ言っておく。拳銃相手には、必勝法がある」

ハヤコ「な、何?」

山田「それは…(ハヤコに近づき上着を脱ぐと防弾チョッキがある)防弾チョッキだ！」

古澤「けっこう普通だ！」

ハヤコ、山田の頭に銃を撃ち、山田、倒れる。

古澤「山田…!!防弾チョッキ関係ないところ撃たれたー!!」

ハヤコ「茶番はもうお終いだ…!」

ハヤコ、フラフラと古澤達に近づくが、山田が不意に起き上がりハヤコの腕を捻って倒す。

古澤「山田…!!」

ハヤコ「どういうことだ…!?確かに弾は頭に当たったはずだ！」

山田「くつくつく。予め頭の中に薄いメットを仕込んでいたんだ。(頭のカツラを外しながら)言っただろう、頭にはとっておきの策が入っている、とな」

古澤「山田…!自分の漫画の時よりカッコ良い！」

山田「今のうちにメンコを奪ってしまえ！」

OL「うん！」 ハト次郎「くるっく！」

OL、ハト次郎、山田の3人、ハヤコから9つのメンコを奪い取る。

ハヤト「う…俺は、いったい…？」

古澤「やった！ハヤトの体からメンコエンペラーの気配が消えた！ハヤトが帰ってきた！」

ハヤト「ごめん、メンコファイター。迂闊にあのメンコを触ったばかりに」

古澤「気にするな。もう触らなければ問題ない。触らなければ」

ハヤトと古澤、メンコを持つ山田、OL、ハト次郎を見る。

間

山田「今度はこの3人を」

OL「乗っ取った」

ハト次郎「ぼー…!!」

古澤「馬鹿…!!」

漫画神「やはり…環自身がバッドエンドを克服しないとイケないのか…！しかし、環が克服しようとしているのは確かだ。後は何か、きっかけさえあれ、ぼ？マズイ、こんな時に…もう時間か。あの担当の中にいられる時間が…終わる…！」

鈴木、がくつと倒れる。環はそれに気づかない。

山田「くっ！俺の中に…勝手に入るな！」

OL「やめなさい！」 ハト次郎「くるっぼー！」

ハヤト「あれ？3人の様子が？」

古澤「そうか！いくらあのメンコとはいえ、3人の体を同時に乗っ取るのは難しいみたいだ」

3人「ぐぐぐぐ…！（踏ん張る顔）」

古澤「だったら今度は…敢えて俺達2人もあの中へ入ろう！内側から俺達の意志とメンコエンペラーの魂を戦わせ、あいつの魂を消し去ってやるんだ！」

ハヤト「分かったぜ！」

古澤とハヤト、3人の持つメンコに触る。

環「ハッピーエンドにする…！ハッピーエンドに…！ハッピーエンド…って、なんだ

よ……！」

鈴木「(がばっと起き上がる) ……環先生！すみませんでしたー！」

環「は？何？急にどうしたの？大丈夫？」

鈴木「あれ？いえなんか夢見てたのかな…他の漫画のキャラが先生の作品に出てたし…」

環「何言ってるの？今こうなってるどころでしょうよ(タブレットを見せる)」

鈴木「うわあ！夢じゃなかった！」

環「あなたが手配してくれたことでしょう。ホントに大丈夫？」

鈴木「大丈夫です。逆になんか今頭スッキリしてますから」

環「それで何さ？さっきのすみませんって」

鈴木「あ、いえその、先ほどは色々テンパって先生を追い詰めるような真似をしてしま…い…余裕がないのは先生も同じはずなのに」

環「…ホントだよ。私は超真面目だからさ。追い詰められやすいのよ」

鈴木「知ってます」

環「え？」

鈴木「だから先生。もうハッピーエンドなんて、描かなくて良いです」

環・漫画神「は？」

鈴木「あ、いえ、言い方間違えました。先生、先生は先生の描きたいものを描いてください」

環「描きたいもの…？」

鈴木「先生は、本当に漫画に真面目です。全てを受け止めてしまいます。だから先生がハッピーエンドのリハビリのために短編漫画を投稿してた時も、もらった批判コメント1つ1つを受け止めてしまい、ますます混乱していったのだと思います」

環「何それ…そんなこと言われたら、本当に私が真面目みたいじゃない」

鈴木「だってそうですから。このメンコフアイトゴーも、先生はハッピーエンドの描き方が分からなくなっているのに、周りからそれを描け描けって言われたら、そりゃあ混乱もしますわ。ま、それにしたって先ほど描かれてたバッドな展開の数々は酷かったですけど」

環「うるさいよ。…だから、何も考えないで、私が描きたいように描けってか？」

鈴木「はい。先生は、ハッピーエンドとかバッドエンドとかそんなの考えないで、先生がただ単純に描きたいと思うラストを描いてください！どんな結末でも私、いえ、ダッシュ編集部は受け入れます！受け入れさせます！」

漫画神「あの担当編集…」

環「…ふふ、くそー」

鈴木「先生？」

環 「いや、なんか軽くなったよ。しかしそこに気付くとは、中々やるな鈴木君」

鈴木 「はい。ある大先生曰く、私、大分編集者っぽくなってるらしいですから」

環 「はいはい。さて、その大先生が描きたいラスト、私がこうあってほしいと思うラスト、か。うん、とりあえず描いてみないと分からないけど、ただまあこれだけは言えるかな。そのラスト、バッドエンドだけには…絶対したくないな!!」

漫画神 「頼むぞ…!」

古澤・ハヤト・OL・ハト次郎・山田、段々静かになる。

5人 「はっはっは…はっはっはっはっは!」

ハト次郎 「我はメンコエンペラーだ!」

OL 「本気を出せば!」

山田 「5人程度簡単に操ることができるわー!」

5人 「はっはっはっは!」

環 「5人、じゃないんだな」

サヤカ・テツロウ・ジン・暗黒太郎が真ん中から出てくる。

5人 「ば、馬鹿な!? お前達は致命傷を受けて死んだはずだ!」

ジン 「それはお前の妄想だろ?」

テツロウ 「僕達はこれのおかげで、致命傷を避けたんだな」

4人、懐から分厚いメンコを出す。

5人 「分厚いメンコ…だと…!?!」

ハヤト 「皆! 無事でよかった!」

古澤・OL・ハト次郎・山田 「黙れ! 出てくるな!」

古澤 「俺の言った通り、忍ばせておいてよかっただろ?」

ハヤト・OL・ハト次郎・山田 「黙れ! 喋るな!」

山田 「形勢逆転か?」

OL 「お腹空いてきたわ」

ハト次郎 「くるっくー」

ハヤト・古澤 「黙れ!」

古澤・ハヤト・OL・ハト次郎・山田 「黙れ!」

古澤・ハヤト・ハト次郎・山田 「黙れ!」

古澤・ハヤト・山田 「黙れ!」

古澤・ハヤト「黙れ！」

ハヤト「黙、れ…？」

間

暗黒太郎「黙るのはお前の方だったな、メンコエンペラー」

4人、5人の持つメンコに触る。9人、1人1つずつメンコを持つ。

9人「はあああああ!!!」

メンコ(声)『ふ、ふぎけるな！我は…我はメンコエンペラーだ…！こんな、こんな時代で…！』

環「ごめんね。でも、ありがとう」

9人「いっけえええええええええ!!!」

メンコ(声)『ぐ、ぐぐぐ！この我の意志が…！この我が…消えてしまおう…！くそ、くそ、

くそおとおお!! (エコー入る)』

環「ピロリン♪(送信サレマシタ)送信されましたってね」

漫画神「…よくやった」

古澤「はああ…！」

鈴木「お見事です先生…ハッピーエンドです…！ハッピーエンドですよ！」

環「そう…これが、ハッピーエンドか。久しぶり。元気にしてた？」

鈴木「なんですかそれ」

環「…これからまた、よろしくね」

徐々に暗転していく。

【エピソード】

明転。

舞台には古澤と漫画神。雑談をしている。

漫画神「はっはっはっは、今回は疲れたな」

古澤「ホントですよ。もうここまで大変なのはこりこりですよ」

漫画神「まあそう言うな。我々の頑張りも無駄ではなかったぞ」

古澤「え？」

漫画神「あの『メンコフアイトゴ』の最終回な、あのめちゃくちゃな展開が意外に読者からウケてるみたいだ。まあ勿論、賛否両論はあるがな」

古澤「へーそうなんですか。よかったです」

漫画神「なんだかんだって、最後はどうしようもない程のハッピーエンドを望んでいる人が多いということなのかもな。うんうん」

古澤「急に他の漫画の主人公が出てきたのも、大丈夫でした？」

漫画神「うむ。逆に考察サイトで盛り上がっているようだ。4つの作品の関連性についての考察だな」

古澤「ああまあ確かにそういう考察が好きの人って勝手に深く考えてくれますもんね。しかし良い方向に盛り上がってくれているのでしたらホント頑張ってるハッピーエンドにした甲斐もあったというものです」

漫画神「まあ今回は作者自身も頑張っていたしな」

古澤「あれ？でも俺、もう漫画が完結したのにここで神様とお話をしていても良いのでしょうか？完結した後俺はそのまま漫画の世界で暮らしていくものとはかり」

漫画神「ああそれなのだがな。國分環、『メンコフアイトゴ』の最終巻で巻末に書き下ろしをするみたいだな。最終回の後日談を」

古澤「へーそうなんですか。やる気ありますね」

漫画神「ということ、お前のサブキャラとしての出番もまだ少し残っているのだよ」

古澤と漫画神、上手端へ移動する。下手から環と鈴木が椅子を持って出てくる。

鈴木「いやー後日談の件、ありがとうございます」

環「なんか私の中でまだ終わった気がしなくてさ。まだまだ描き足りない感じなのよ」

鈴木「それで6ページも描いて頂けるとのことなのですね」

環「まあね。それにあの最終回、かなりスパッと終わってるし」

鈴木「そうですね。あの最終回もよかったですけど、やっぱりあの後ハヤト達がどうなっていくのかも気になりますからねえ。後日談、読者も楽しみにしていると思

いますよ」

環 「うん。それでさ、早速考えてきたんだけど」

鈴木 「はい」

環 「後日談、最終回からもう20年後の話にしようと思って」

鈴木 「なるほど。そういうパターンも有りですね」

環 「仲間達皆が久しぶりに集まって色々話をしているのよ」

鈴木 「なるほど。そこで20年後の今、皆がどうなっているのか分かるという訳ですね」

環 「そうそう。皆もう30代前半だからさあ。サヤカちゃん、いやもうサヤカさんなんかは絶賛婚活中よ」

鈴木 「婚活中？なんか生々しいですね…というかハヤトとは結ばれてないの？」

環 「暗黒太郎なんてもう還暦だから、初老でボケてるのよ(笑)」

鈴木 「え？は？ボケてる？かつこ笑い？ちよつと先生？」

環 「この20年でジンはオネエになってるし」

鈴木 「オネエ！？ジンに何があつたの！？」

環 「テツロウとかは…もう亡くなってる」

鈴木 「死んでるの！？まだ30代ですよ？主要キャラをそんな理由もなく死なせちゃ駄目ですよ！というかデジャブなんですけどこういうやり取り！最終回の時もしましたよ！」

漫画神 「あれあれあれー？なんだか様子がおかしいぞー？どういうことだー？」

古澤 「これ…あの、信じたくないですけど、環先生…またバッドエンド環に戻っているということですかね！？」

漫画神 「いやいやいやいや、そんな馬鹿な。もう彼女はバッドエンドを克服したから…したはずだから。最後はハッピーエンドになるよ、大丈夫。うん、大丈夫だよ…多分…おそろく」

鈴木 「ハヤトは？肝心のハヤトは、どうなってるんですか？」

環 「ハヤトは…後日談に出てこないかな」

鈴木 「なんで！？主人公なのに！」

環 「いやいや出てこないって、顔だけだよ」

鈴木 「だからなんで！？顔こそ出してあげてくださいいよ！」

漫画神 「…心配だあ」

古澤 「ですよねえ。というかこのままいくとこれって…せっかく本編がハッピーエンドで終わったのに、その後日談がバッドエンドで全部台無しになっちゃうやつじゃないですかね！？」

漫画神 「ちくしょー！余計タチ悪いやつだよそれー！」

鈴木 「ちよ、ちよつと環先生！大丈夫なんですか？」

環 「何がよ？大丈夫大丈夫(タブレットに描いている)」

鈴木「先生今、血まみれの人間を描いてますよね？後日談に必要ですかその絵？」
漫画神「駄目そうだな…」

古澤「はい…」

鈴木「よく見たらこの人間メンコファイターですよね？」

漫画神「お前死ぬみたいだぞ…」

古澤「なぜ…」

鈴木「ちよつと先生ー！」

環「筆が進む進む！」

漫画神「こうなつては仕方がない…（古澤の肩に手を置く）もう一仕事するぞ！」

古澤「うへえー…！」

OPBGMがバックにかかる。古澤とハヤト、サブキャラ達、他の作品の主人公達が環と鈴木のやり取りに合わせて舞台上に出てきてわちゃわちゃと動く。

環「じゃあさじゃあさ！人が集まる大通りに、トラックがどーんって」

鈴木「出たトラック！」

環「突っ込んできて、ハト次郎がひかれる」

鈴木「なんで!？」

環「そしてトラックの運転手はあのゲームの後、上手く仕事を見つけれなかったジーンアス山田で」

鈴木「他作品のキャラまで巻き込みはじめた！最悪だ！」

徐々に暗転していく。

鈴木「先生！この後日談、どういう結末にしたいんですか!？」

環「そりやあ勿論、私の描きたい結末に決まってるじゃん！」

鈴木「確かに私もそう言いましたけど！もうーう！最後の最後がバッドエンドになったらどうする気ですか!？」

環「それは無いよ。だって私は、ハッピーエンドが描きたいんだから！」

完全暗転。

【終】